と勇氣とは、稱揚せざらんと欲するも、能はざるなり、又其說のショペンハウェル氏と同一轍に出づるもの、眞に奇異なる暗合といふべきなり、

（五）　正邪の標準

凡そ道德を論ずるには、正邪の標準を立てざるべからず、然らざれば假令ひ千言萬語を費やすも、其據りて正うする所なきなり、然るに古來和漢の學者にして、道德を論ずるもの、多くは正邪の標準を立つるの要を知らざるが如し、獨り徂徠は分明に正邪の標準を立つ、其言に云く、

正は邪の反、先王の道に循ふ、是れを正といふ、先王の道に循はざる、是れを邪といふ、邪謀邪說の如き、以て見るべきのみ、己れを規矩準繩に辟ふ、正うするを爲す所以の器なり、規に循へば、圓なるもの正しく、矩に循へば、方なるもの正しく、準繩に循へば、平直なるもの正し、先王の道は、規矩準繩なり、故に先王の道に循つて而して後、正しとなす、（辨名上）

と、此れに由りて之れ觀れば、彼れ先王の道を以て正邪の標準とせり、凡そ正邪は先王の道に從ふと否とによりて定まる、其先王の道といふは、他なし、禮樂なり、彼れ一轉して宋儒の標準なきを攻擊して曰く、

後世理學興り、先王の禮を舍て、理を以て之れを言ふ、理を以て之れを言ふもの、其臆に取るのみ、其臆に取るを正しとせば、是れ人自ら正しとなす、妄といふべし、（同上）

徂徠は正邪の標準を客觀的に立つ、故に宋儒の主觀的考察と相容れず、乃ち其道德に就いて斷定する所を悉く臆測に出づるとなすなり、然れども彼れが善惡に關する見解は亦差、之れと齟齬する所あるに似たり、其言に云く、

善は惡の反、泛く之れを言ふものなり、其解、孟子に見ゆ、曰く、「欲すべき之れを善といふ」、先王の道にあらずと雖も、凡そ以て人を利し民を救ふべきもの、皆之れを善といふ、是れ衆人の欲する所なるが故なり、云云（同上）

此れに由りて之れを觀れば、善惡の標準は、即ち利益にして、必ずしも先

王の道に從ふと否とに拘はらざるなり、是れ前に先王の道を以て正邪の標準とすると其旨意遂に整合せざるなり、且つ彼れが「凡そ以て人を利し民を救ふべきもの皆之れを善といふ」といふを以て之れを觀れば、彼れは功利主義を懷くものにて、即ち個人の德性よりは、寧ろ社會の公利、公益を主とするものなり、尾藤二洲曾て徂徠を論じて曰く、

彼れは聖門の學者にあらず功利のみ事とせる者なり、孫子を好みて國字解を作れるは、其本志の注ぐ所なり、管晏を崇びて、霸は王の未だ成らぬなりといひ、孟子の王霸を辨ぜるは、先王の道を知らぬなりといへる類、みな其本意の所在を見るべし、

と眞に然り、徂徠は全く功利主義を懷くのもにて、孔孟の徒といはんよりは、反りて管商の徒に近しといふべきが如し、而して彼れが先王の道を尊崇するも、亦其利用厚生の點にあること疑なきなり、是故に彼れが仁齋に於けるは、陳龍川が朱子に於けると其關係甚だ相似たるものあるを知るべきなり、

## (六)　天命の說

徂徠は天命に一任する處に安心立命の境界を得たり、其言に云く、

其人智人力のとゞき不申場にては、天命に打ち任せ候より外更に他事無御座候、是故に勇怯の根本と申候は、天命を知ると知らぬとに落着仕候事にて御座候、(答問書上)

と、乃ち天命を知れば、勇氣生じ、天命を知らざれば、安心なり難しとの意なり、又云く、

天命に明かに候へば、一天下の事に心を動かし申候儀は無御座候、(同上)

唯天命は人力を以て之れを奈何ともすること能はず、故に之れに一任するより外なし、然れども天を敬し、天に禱り、天道の助を俟つべしとせり、其言に云く、

聖人の道は、天を敬し祖宗を敬し候事を本と致し候、(答問書中)

又云く、

天を御敬ひ候ふて過を改め德を修むるに若くは無御座候、聖人の敎の外に別に祈禱の法は有間敷候、(同上)

尙ほ徂徠は天を敬するは聖門の第一義にして、學問上最も重大なる事件なりとせり、乃ち論じて曰く、

聖人の道、六經載する所皆天を敬するに歸せざるものなし、是れ聖門の第一義なり、學者先づ斯義を識りて、而して後、聖人の道得て言ふべきのみ、(辨名下)

是に至りて徂徠の見解は殆んど宗敎と類似するものあり、殊に彼れは天を以て知るべからざるものとせり、知るべからざるものを以て道德の根柢となすこと、宗敎と同一轍に出づといふべきなり、

## 第三　學問論

徂徠の學問は宋儒及び仁齋の如く、己れが知力によりて道德上の事を攻究し、以て身を修め、行を正うすることを主とせずして、獨り先王の道を學ぶことを主とせり、然るに先王の道は詩書禮樂にありとするが故に詩書禮樂を學ぶを以て唯一の學問とせり、其言に云く、

學は先王の道を學ぶを謂ふなり、先王の道は詩書禮樂にあり、故に學の方、亦詩書禮樂を學ぶのみ、是れ之れを四敎といひ、又之れを四術といふ、詩書は義の府なり、禮樂は德の則なり、德は己れを立つる所以なり、義は政に從ふ所以なり、故に詩書禮樂は以て士を造るに足る、(辨名下)

徂徠は又先王の道を以て民を安んずる所以のものにして、其要は仁にありとし、之れを學ぶは德を我れに成す所以なりとせり、其言に云く、

先王の道は、民を安んずる所以なり、故に先王の道を學んで、而して其然る所以を知らざれば、學得て成すべからず、故に孔門の敎必ず仁による、苟も其心常に先王安民の德により、造次にも是に於てし、顚沛にも是に於てし、終食の間も敢て之れと離れざれば、德の成るや速にして、以て先王の心を達すべきなり、然りと雖も先王安民の德大なり、故に孔門の敎、又必ず中庸による所、謂孝弟忠信、是れなり、(同上)

又云く、

孔門の教、仁によるを以て德を成すの要となす、云云、故に孔門の教、又孝悌忠信を以て進德の本となす、是を以て千萬世の後と雖も、聖人の道を學ぶもの、必ず詩書禮樂を以て本業となし、以て仁と中庸とにより、其德を成さんことを求む、則ち亦先王孔子の教に畔かずとなすのみ、(同上)

此れに由りて之れを觀れば、徂徠の學問は矢張宋儒及び仁齋と同じく、道德を對象とするものなり、唯道德の意義異なるのみ、故に

學は、先王の道を學んで以て德を己れに成さんことを求むるのみ、故に道德の外、豈に它あらんや、(同上)

といへり、然れども宋儒及び仁齋の如く、直に反省考察して道德を內界に得んとするにあらず、

近世叢語卷之八に云く、

物徂徠曰く、世儒理に醉ひ、道德仁義、天理人欲、口を衝いて以て發す、予之れを聞く毎に、便ち嘔噦を生ず、乃ち琴を彈じ、笙を吹く、否らざれば則ち闞々たる雎鳩、以て其穢を洗ふ、是に於て柳下惠の及ぶべからざるを愧づるのみ、

乃ち知るべし、道德を談ずるは、其本色にあらざるを、彼れは寧ろ己れが知力を置き、卑々然として膝を屈し、先王の道を學び、此れに由りて身を立てんと欲するものなり、彼れ論じて曰く、

學問の道、聖人を信ずるを以て先きとなす、蓋し聖人知大に仁至る、而して其思深遠なり、其人を教ふるの法、國を治むるの術を立つる所、皆迂遠にして人情に近からざるが若きものありて存す、乃ち後儒好んで自ら其智を用ひて、聖人の深からざるを信ず、故に其意謂く、上古の法、今世の宜に合はず、遂に別に居敬窮理主靜致良知種々の目を立つ、是れ其私智淺見のなす所のみ、殊に知らず道古今なく一なり、設使ひ聖人の教、今世の宜に合はざるも、亦聖人にあらず、故に學者苟も能く一意聖人の教に遵ひ、之れを習ふこと久しく、之れと化して、而して後、

能く聖人の教萬世に亙りて得て易ふべからざる者あるを見る(同上)

此の如くなれば徂徠の學問は殆んど宗教に類せり、宗教として自由討究を許さゞる「オルソドクス」(即ち正教派)に匹似す、己れが知力は毫も頼むに足らずとして、專ら聖人を盲信することを慫慂するが如き、抑〻又己れが知力を侮るの甚しきものといふべし、其言に云く、

夫れ聖人の教は至れり、豈に能く勝ちて之れに上らんや、凡そ聖人の言はざる所のものは、迺ち當に言はざるべき所の者のみ、若し當に言ふべき所のものあらば則ち先王孔子既に己に之れを言ふ、豈に未だ發せざるものありて、後人を待たんや、亦思はざるのみ(辨道)

徂徠が先王孔子を過信すること、是に至りて極まれりといふべし、先王孔子が當に言ふべき所を言ひ盡くせりとせば、學問の進歩抔といふことは有り得べからざる事なり、徂徠は其性の豪膽なるに拘はらず、知的探究の一點に關しては甚しく卑屈に陷れり、是故に彼れは哲學的考察の開導に助力せずして寧ろ之れを沮礙し、人を驅りて文藝若くは考證に赴かしめたり、彼れ更に斷言して曰く、

大氐後儒一物の識らざるを以て恥となす、殊に知らず古の所謂知とは、仁を知るを貴ぶなり、孔子未だ嘗て知を好むを以て教となさず、今の學者當に古言を識るを以て要となすべし、古言を識らんと欲せば、古文辭を學ぶにあらざれば能はざるなり(同上)

孔子は情的道德を以て人を薫化せしものにて、曾て知的探究を務めざりき、然れども其知的探究を務めざりしは寧ろ其短處なるのみ、孔子が知的探究を務めざりしといふを以て、總べて知識を排斥するが如き、無謀も亦甚しといふべし、然れども徂徠は之れを敢てし、己れを愚にし、併せて人を愚にせんとせり、

彼れ又窮理の弊を排して曰く、

理やは窮りなきものなり、天下の事、理を以て之れを言はゞ、言ふべからざることあるなし、是れ諸子百家の由りて興る所なり、故に古聖人能く其必ず是の若くなるを知る、而して未だ嘗て人に教ふるに理を

以てせざるもの其思深遠なりといふべし(與藪震菴書)

苟も理を論ずれば其爭止まず諸子百家從つて興らざるを得ず然れども是れ毫も憂ふべきことにあらず何んとなれば此の如くならざれば智識の發展期し得べからざればなり、ソクラーテスの孔子に比して適に知的探究の精神に富めりしことが、やがて深邃なる哲學諸派を惹起する本源となりしを思はゝ理を論ずることの如何に德を修むると共に人生に必要なるかは復た辨を費やすを須ひざるなり假令ひ彼れ、

學問の道は思ふを貴ぶ思ふの時に方りて老佛の言と雖も皆吾助とするに足る何ぞ況や宋儒及び諸家の說をや(同上)

といふも彼れが學問は先王の道を學ぶを以て主とするが故に力を詩書禮樂に用ふるのみ詩書禮樂は先王の道の存する所なればなり詩書禮樂を攻究せんには古書を讀まざるべからず古書を讀んで能く之れを了解せんには古文辭を識らざるべからず此れ古文辭學の必然に相伴ふて起る所以なり彼れ乃ち論じて曰く、

讀書の道古文辭を識り古言を識る之を以て先きとなす宋の諸老先生の如き其稟質聰敏操志高邁豈に漢唐諸儒の能く及ぶ所ならんや然れども韓柳出でいよいよして後文辭大に變ず而して言古今殊なり諸先生其後に生まれ今文を以て古文を視今言を以て古言を視る故に其心を用ふる勤むと雖も卒に未だ古の道を得ざるもの職として此れに之れ由る明の滄溟先生に及んで始めて古文辭を倡ふ而して士頗る能く古書を讀み後世の書を讀むが如きもの亦之れあり祇其志す所僅に丘明子長の間にありて而して六經に及ばず豈に惜からずや然れども苟も能く其敎に遵つて而して古今文辭の殊なる所以を知らば則ち古言識るべく古義明かにすべし而して古聖人の道得て言ふべし云云(辨名下)

徂徠此の如く古文辭を識るを以て學問の階梯とするが故に其研究は必然に古語學的となり哲學的考察とは反對の進路を取るに至れり經書の解釋に就いては彼れ間奇拔の見解を有することありと雖も哲學

に關する一家の創見として、學ぐべきものは、割合に少し、此點より之れを言へば、仁齋に對して頗る遜色あるものといふべきなり、然れども仁齋は道德の効夫に全力を用ひしが故に考證は適に徂徠に及ばざるの看あり、徂徠と仁齋と一長一短、恰も掎角の勢を成すものゝ如し、徂徠は仁齋と見解を異にし、博聞多識を以て必要の學問とせり、故に殊に歷史の攻究せざるべからざることを言へり、彼れ論じて曰く、

人才を生ずるは學問に越ゆることなし、學問は文字を知るを入路とし、歷史を學ぶを作用とすべし、(太平策)

又曰く、

見聞廣く、事實に行き涉りたるを學問と申す事に候、故、學問は歷史に極まり候事に候、(答問書上)

又曰く、

學問は只廣く何をもかをも取り入れ置きて、己れが知見を廣むる事にて御座候、(同上)

是れ廣く古今の事實を究明し聖人の道をも了解し、以て自ら國家の一材たるを期するの意を述ぶるものなり、然るに或る時は又獨り文章のみを以て學問とし、論じて曰く、

總べて學問の道は文章の外無之候、古人の道は、書籍に有之候、書籍は文章に候、能く文章を會得して、書籍の儘、濟まし候て我意を少しも雜え不申候へば、古人の意は明に候、聖人の道は、聖人の敎法に順はずして可得樣曾て無之候、其敎法は、書籍に有之候故、つまる所是れ又文章に歸し申候、然る所文章字義も時代に隨つて致展轉候所、眼の付け所にて候に、後世儒者我物ずきを立て候故、道德は尊く、文章は卑き事なりと思ひとり、文章を輕看致し候より、右の所に心付き不申、右の所に心付き不申候故、古聖人の敎法見え分れ不申、我知見にて聖人の意を會得せんとする故、皆自己流に被成候、末學の輩は、識見益〻鄙陋にて程朱陽明、吾國にて闇齋仁齋等の末師を信ずる事、孔子よりも甚敷候、たとへて申候はゞ、佛者の輩釋迦の說をば用ひずして、深く法然日蓮を

信ずるが如くに候、敎に古今なく、道にも古今なく候、聖人の道にて、今日の國天下も治り候事に候、外に仕方は無之候、聖人の敎にて、今日の人も才德を成就候事に候、是れ又外に仕方無之候、古今通貫不申候ては、古聖人の道とも敎とも不被申候、道も敎も普く天下の人に被らしむる事にて、天下の人には、愚不肖多く、賢智少く候事、是れ又古今の替りなく候、然れば古聖人の道も敎も後儒の申候樣なる理の六つかしき事は、決して無之筈なる事明かに候、理の六つかしき事は、愚なる人は會得成不申事故、古聖人の道も敎も、皆わざにもたせ置き候事にて、其わざさへ行ひ候へば、理は知らず候ても、自然と風俗移り候所より、人の心も直り候て、國天下も治まり、又一人の上にても、風儀の移る所より自然と知見各別にひらけ行きて才德を成就する事に候、是れ聖人の道、聖人の敎法の妙用に候、是故に今日の學問は、ひきくひらたく、只文章を會得する事に止まり候、文章を會得して古の詞濟み候へば、古聖人の道も敎もわざにて候故、詞の上にて直に見え分れ申す事に候、只々異國人の古の詞を會得する事、故文章を會得する事、六ッがしく候、（答問書下）

徂徠が此の如く文章を尊重したる結果として文藝は考證と共に大に興れり、然れども之れが爲めに反りて道德を疎外したるが如き形迹あるは、最も惜むべしとなす、功罪相償はずとは、蓋し徂徠の如きものをいふなり、

## 第四　敎育論

敎育に關しては徂徠は極めて寬宏なる態度を取り、小節に屑々たらずして寧ろ清濁併せ呑むの概あり、乃ち知るべし、彼れが取る所の敎育主義は極端なる放任主義なるを、彼れが實際いかに子弟を敎育せしかは、已に第五學風の下に詳悉せしを以て重ねて此に之れを叙述せず左に唯彼れが懷抱せし所の敎育上の見解を擧げん、彼れ辨道の中に聖人の德を論じて曰く、

大氏聖人の德、天地と相似たり、聖人の道、含容廣大、要は養ふて之れを

成し、先づ其大なるものを立てゝ、小なるもの自ら至るにあり、

是れ蓋し彼れが教育主義の由りて出づる所なり、其氣象の博大にして迫らざる處、大に好し、彼れ更に委しく其胸中を吐露して曰く、

思孟以後の弊は、之れを說くこと詳かにして、聽くものをして喩り易からしめんと欲するにあり、速に其說を粥がんと欲するものなり、權、彼れにあるものなり、人を敎ふるの道は然らず、權、我れにあるものなり、何んとなれば、君師の道なり、故に善く人を敎ふるものは、必ずこれを吾術中に置く、優游の久しき、其耳目を易へ、其心思を換ふ、故に吾言を待たずして、而して彼れ自然に以て之れを知るあり、猶ほ或は喩らざるや、一言以て之れを啓けば、渙然として氷釋し、言の畢るを待たず、故に敎ふるもの勞せずして、學ぶもの深く喩る、何んとなれば、吾れ言はざるの前、思既に半に過ぎるが故なり、先王孔子之れを以てす、

（辨道）

是れ言論を主とせずして、感化を主とする敎育主義にして、議論の上より之れを言へば固より間然する所なし、彼れ更に一轉して先王の敎育と孟子の敎育との間に甚しき相違あることを辨明して曰く、

先王の敎は、禮樂言はず、行事を擧げて以て之れを示す、孔子憤せずんば、啓せず、悱せずんば發せず、豈に然らざらんや、孟子に至りては、强辨以て之れを聒うす、而して是れを以て人を服せんと欲す、夫れ言を以て人を服するものは未だ能く人を服せざるものなり、蓋し敎は我れを信ずるものに施す、先王の民は、先王を信ずるものなり、孔子の門人は、孔子を信ずるものなり、故に其敎入ることを得、孟子は、我れを信ぜざるの人をして、我言によりて我れを信ぜしめんと欲す、是れ戰國游說の事、人を敎ふるの道にあらず（同上）

言語を以て人を服せず、行爲によりて人を服するは、孔子の如く禮儀を重んずる有德の人にして始めて之れを言ふべし、徂徠の如く德性を輕侮して功利を偏重し、文藝是れ事として禮儀に拘はらざる者の言ふべき所にあらず、彼れが門人數多なりしも、春臺の外一人も德行を以て顯

はるゝものなきは、彼れが教育の過失に因由すること疑なきなり、彼れ又古今教育の異同を論じて曰く

後世迺ち思孟程朱を信ずること、先王孔子に過ぎたり、何ぞや、蓋し先王の教物を以てして理を以てせず、教ふるに物を以てするものは、必ず事を事とすることあり、教ふるに理を以てするものは、言語詳なり、物は衆理の聚まる所なり、而して必ず從事するものの之れを久うして乃ち心實に之れを知る、何ぞ言を假らんや、言の盡くす所のものは、僅々乎たる理の一端のみ、且つ身從事せずして而して能く立談に瞭然たるは、豈に能く深く之れを知らんや、(同上)

實物を以て教育をなすの適切なること、何人も否定すること能はざるべし、然れども之れと同時に道理を教へざれば、何の効驗もなし、是れ實物は何事をも語らざればなり、實物は道理を說示するに必要なり、唯實物のみありて、毫も道理を說示せざれば、教育は全く無精神となるなり、太古草昧の時は、多く道理を說示せざりしとするも、此の如きは後世の依準すべき所にあらず、智識を開發し、文明を增進せんには、唯道理を闡明することの晩きを憂ふべきのみ、然れども徂徠、宋儒の理を說くこと煩瑣に過ぎ、其人を教ふること、嚴肅に失するを厭ひ、之れが反動として此言をなすと思へば、亦大に恕すべき所なきにあらざるなり、彼れ又人物をして各其養を得せしむべきを論じて曰く、

大氐人物其養を得れば則ち長じ、其養を得ざれば則ち死す、啻に身のみならず、才知德行皆爾り、故に聖人の道養ふて以て之れを成すにあり、(同上)

其旨意たる殆んど天才教育を道破せんとするものに似たり、是れ蓋し彼れが宋儒の嚴肅主義に對して、主張する所にして、其自由の精神に富めるは、甚だ喜ぶべき所なり、彼れ曾て人に與ふる書中に論じて曰く、

言語を以て人を喩さんとする事、大方はならぬ事にて候、此方より申候程の儀は、大方は先きも合點なるものに候、只わが心よりさとるとさとらざるにて了簡は替はる者にて候を、さとらぬ人を口上にて申

すゝめ候はゞいやがり候も斷に候云云先きのおのづからにひらけ候をよしと致し候事に候其事となしに外の事より申候へば得道まゐる事もあるものに候其事の是非を爭ひ候へば先きの氣立ちて居候故相手立ち候て必ず爭になるものに候爭にかち候はんは合戰に勝つが如くに候故怒はやみ不申候云云われを信せざる人に向つて道理を說き候事何の益も無之事に候（答問書中）

是れ直接敎育に就いて論じたる事にはあらざるも亦敎育上の意見として見るを得べく彼れが平生の寬容主義は此にも十分露はれ居るなり彼れは又行政の方法によりて社會敎育を成さんとの見解を有せしの如し其言に云く、

聖人の道を大道術と申候國家を治め候も直に善惡邪正を正し見えわたりたる上にて、さつぱりと仕候事にては無御座候俗人の思ひがけぬ所より仕懸けを致し候て覺えず知らず自然と直り候樣に仕事に候人才を養ひ候も同じ事に候（同上）

是等の政策は宋儒及び仁齋等の思ひ及ばざる所にして即ち徂徠一家の長處と見るを得べきなり、

## 第五　政治論

徂徠は儒敎の本領は政治にありとするものにて宋儒及び仁齋等が個人的修德の工夫に全力を盡くすとは大に徑庭あり彼れが先王孔子の道は天下を安んずるの道なりとし具躰的に之れを言ひ表はして禮樂刑政に外ならずとするを以て之れを觀れば彼れが眼に映ぜる儒敎は政治を以て本領とするものなること論を俟たざるなり先王の道といへば帝王及び其他執政者の傳へたる政治の主義なるが故に徂徠の解釋せる所の如し然れども孔子は稍〻之れと異なれり孔子も政治權を握り其平生の抱負を實行せんとせしも遂に十分に其志を遂ぐるの機會を得ざりき故に退いて書を著はし之れを後世に傳ふるに至れり故に孔子は帝王の比にあらずして寧ろ民間の偉人なりき固より精神界の帝王とはいふべきも執政者としての帝王にはあらざりき故に孔子と

先王とを一樣に論斷するを得ざるものあり、孔子の道は先王の道に本いて立つる所なるに相違なきも、亦道德の敎訓を後昆に垂れたる聖人なり、故に其說く所は獨り政治に限るにあらず、個人の品性を修養するに適切なるもの、敎訓の大半を占むること、論語を一瞥しても知るべきことなり、然れども徂徠は孔子は先王の道を傳へたるものとし、道といへば必ず先王の道を主として之れを論ぜり、故に彼れが儒敎の本領政治にありとするもの、必然の結果といふべきなり、彼れ太平策、答問書及び政談の三書に於て政治上の見解を敍述せり、然るに其政治論は畢竟二種の事件に歸す、其一を安民とし、其一を知人とす、知人は安民の爲めに必要なる條件にして、彼れが最も得意に其方法を說破する所なり、彼れ先づ政治の要訣を論じて曰く、

在安民在知人と云ふ二句は聖門の萬病圓なり、制度を立て替ふるやうなる大儀も、此二句にあらざれば、行はれず、何れの世、何れの國にても、又雜霸の小道を行ふ人も此二句にあらざれば、功を成すこと能はぬなり、安民は仁なり、知人は知なり、(太平策)

又後世の儒者、仁を誤解せりとして、論じて曰く、

後世の儒者、仁と云ふは、至誠惻怛などゝ釋すれども、たとひ至誠惻怛の心ありとも、民を安んずること能はずんば、仁にあらず、何ほど慈悲心ありとも、皆徒仁なり、婦人の仁なり、母の子をかわいがる類なるべし、或は孟子に泥みて不忍人心などゝ云ふこと、是れ又婦人尼御前などの心なり、云云、(同上)

然らば徂徠彼れ自身の仁はいかなるものなるか、彼れ固より一家の見解あり、云く、

制度を立てかふると云ふは、風俗をなほさん爲めなり、風俗は世界一まいなるゆゑ、大海を手にて防ぐが如く、からわざにてなほし難し、是れをなほすに術あり、是れを聖人の大道術と云ふ後世理學の輩は道理を人々に說き聞かせて、人々に合點させて、其人々の心より直さんとす、米を臼へ入れて搗かして、一粒づゝしらげんとするに同じ、正眞

の小刀細工なり、又小人の術は、長久に用ひられず、しかも術の迹見ゆるによりて下の奸智を引き起し、上を疑ひ、上をさげすむ心を釀成して益〻風俗をあしくす、云云、風俗は習はしなり、學問の道も習はしなり、善になるゝ善を人とし、惡になるゝを惡人とし、學問の道は、習はし熟してくせにしなすことなり、此外に別に工夫の仕方、修行の手段なきことなり、云云、故に聖人の道は習はしを第一とし、聖人の治めは、風俗を第一とす、されば只今までの風俗を移すことは、世界の人を新にうみ直すが如くなるゆゑ、是れに過ぎたる大儀はなきなり、故に大道術ならでは、是れを直すことはならぬなり、(同上)

因りて彼れは更に其大道術の果していかなるものなるかを論ぜり、其言に云く、

其大道術と云ふは、觀念にもあらず、まじなひにもあらず、神道にもあらず、奇特にもあらず、わざなり、わざの仕かけによりて自然と移り行くことなり、今時の治めは、鼻の先きにて世話をやくを政に盡くすと云ふ、天地の造化は、移り行くものなり、人は活物なり、故に人事の變日を逐ひて生ず、是れ生々不息の妙用なり、かの生々不息なるものを手に執へて作りなほさんとするは、強く押ゆる程、先きにてはばねかへることを知らず、聖人の道は、長養の道なり、造化に隨つて養ひそだて、物のなりゆきを能く知りてかくすれば、先きにかくなると云ふ所を合點してわざの仕懸を以て直すときは、目前には、迂遠なるやうなれども、先きへゆきて、自然と心のまゝになるなり、(同上)

此の如き大道術の要具は、禮樂に外ならざるなり、是故に徂徠は

禮樂にあらざれば、風俗もなほらず、儉約もならぬものなり、(同上)

と云ひ、禮樂の行政上最も効驗あることを主張せり、宋儒及び仁齋の徒が、道學の一方に畢生の力を盡くし、其弊、嚴肅に偏し、小心に失するの時に當り、徂徠が社會的眼孔を具し、天空海濶の政治的見解を立てたるは、大に喜ぶべき所なり、宋儒及び仁齋の徒は、德邵く學深しと雖も、往々にして、迂濶の訾を免れざるものあり、之れに反して徂徠は、能く世事に通

曉し、自ら豁達の處あるを見る、其安民の法として大道術を論じたるが如き、即ち之れを證明せりといふべし、然れども殊に彼れが知人の法を論ずるに至りては、人情の微を闡き、世事の幽を顯はし、殆んど行政の秘術を說破するの趣あるが如し、彼れ論じて曰く、

人君の職分、只人を知るひとつに歸して、是れを人君の智の德と定め、外の智慧は入らぬことなり、この大智あれば、安民の功は、心のまゝになることなり、故に古より聖賢の君の德を稱嘆するには、外の美事をば稱せず、賢臣を得たることをかぞへて稱すること、是れかりそめに云へるにあらず、古の人は、道をよく會得したるゆゑ、ほめどころを知りてほめたるなり、(同上)

又曰く、

愚なる人は、人を知ると云へば、遍く臣の賢愚を悉くに知らんとす、是れ道を知らざる過なり、假令ひ聖人の智なりとも、遍く知り盡くすことはならぬことなり、賢人を知り、擧げ用ひ、委任するは、其賢人が段々に、又賢者を薦達するゆゑのこと、賢者はなき事なり、されども第一の難儀は、一人なりとも賢者を知ること難きものなり、習俗の內に陷り、その眼より見ては、我眼ゆがむによりて賢者は見えぬものなり、見え難きものを能く知るゆゑ、是れを大德とすることなり、又愚なる者の料簡には、人を知ると云ふは、人の人柄、長短得失を知り盡くして、其人を用ひんとするときは、人を用ふることはならぬものなり、人を用ふる道は、其長處を取りて、短處はかまわぬことなり、長處に短處はつきてはなれぬものなるゆゑ、長處さへ知れば、短處は知るに及ばず、唯よく長處を用ふれば、天下に棄物なし、必ず長處短處をつぶさに知らんとすれば、短處を氣遣ふ心つよき故、長處を快く用ふることならぬものなり、云云、されども其長處を知ること難し、是れ又愚なる人のあやまりなり、唯其人をながめ居りて、其長處を知らんとするゆゑ、一生ながめても見えぬなり、人は活物なり、過ぎし昔を見て、其人を知り極むることあるべからず、用ひて見ば長處あらはるゝものなり、委任す

れば、長處まず〳〵はたらきて、今までなき才智も生ずるは、人の活物なるゆゑ、人君の用ひやうにて人才を養ひ成し、器量の人出來るなり、われと吾身にても吾才の長處を知らぬは、用ひて見ぬゆゑなり、まして人の才能を用ひずして知らんとするは、神道を得んと願ふに似たり、恐なるの甚しきにあらずや、（同上）

徂徠が人才を得るの法、仔細に看來たれば、甚だ實際に適切なるものあり、但「其長處さへ知れば短處は知るに及ばず」といふは、未だ必ずしも當れりといふを得ず、短處をも知りて、唯「其長處のみを用ふべきなり、若し短處を知り居らざれば、其如何なる事に不適當なるかを知ること能はず、此の如くなれば其長處を用ふることも、亦甚だ困難ならざるを得ず故に人は其長處と短處とを併せて知らざるべからず、然れども之れを用ふるは、唯「其長處に由るのみ」、「短處は過失を防ぐが爲めに兼ねて知るを要するものなり、彼れ尙ほ論じて曰く、

國土に五穀を生じ、材木萬物を生じ候事、古も今も替はる事無御座、世界の用事にさしつかふる事は何れの世とても無之物に候、人とても其如くに候、尤も聖賢敎養の內より生じ候人と、敎化缺けたる代の人とは、替はり候へども、其時代の用に立ち候程の人才は、必ず有之物に候、國無人と申事有之候を御覽誤り候にても候哉、夫れは朝廷に人なきと申すにて候、朝廷に人なきは用ひざるが故に候、朝廷に人なき世は賢才、下僚に沈み、或は民間に埋もれ候事、道理の常にて御座候を、人なきと被仰候事、孟子に有之候歲を罪するの類にて、天道に對し、勿躰もなき事と奉存候、云云、自分の才智を御用ひ候御病根、翳膜となり候て、ある人の御目に見え不申にて可有御座候、御書面の趣にて察候へば、人才と被仰候は、定めて御望の注文可有之候、其注文に合ひ不申をば、人才には不被成候と相見え申候、（答問書中）

是れ人を知り人を用ふるの能力なき執權者に對しては、最も適切なる訓戒なり、若し彼等にして己れが所望に合する者のみを用ひば、阿諛奸佞の徒、周圍に集まるが如き結果を生ずるに止まらん、彼れ又曰く、

手前の御物ずきを御立て被成候と申候も、見えぬ故の事に候、畢竟は御一人の誤にても無御座、世俗の惡習にて候、世俗の惡習にて人々自分にぬりかくし申候故、滿世界霧の內の如く罷成候、云云、仕置次第に細になり、過失を咎むる事甚しくて、下をも過失なき樣に押へかゝへすると今時はよき役人と申候、是故に面々も過失なき樣にと心懸け、子供をも其樣に敎へいれ候、是れ今世の習俗にて、此心得故、人々物毎に踏み込み深入りする事なく、上をぬり隱す事を第一と仕候、されば人々此の如く心懸け候故、見え兼ぬるもことわりにて候、足下も御先祖樣の時代の事、御聞可被成候、今の世より見候へば、其時分に名を申候能き人と申候は、皆疵物にて候、是れ別の子細に無御座候、其時分はぬり隱し申候事無御座候故、疵見え申候、疵見え申候へば、人才は見え申候、今時も世上の惡俗に染み不申候、人は疵多く御座候間、疵物になら では、人才はなき物と被思召疵物の內にて御えらび可被成候、疵もなく才も長じ候人を御尋ね候はゞ、御物ずきの注文と申物にて候、疵なき人は、鄕原か巧言令色か、扨は庸人と可被思召候、（同上）

徂徠の論、愈出でゝ愈妙といふべし、凡そ人を用ふるに當りて完全なるものを求めば、世上一人も之れあるなし、殊に有用の材は、凡庸より拔き出てたる者なるを以て、其缺點亦必ず著しく見ゆると多し、故に如何なる缺點あるかといふことのみに注目せずして、又如何なる技倆あるかを看破せざるべからず、然れども人の技倆てふものは、實際其人を用ひて局に當らしめざれば、看破することと難し、彼れ此意を述べて曰く、

疵物と申候は、譬へばくせ馬の如くに候、彼れがくせを致し申候時の取り納めの仕樣合點不參候內は、氣遣にて被乘不申候、是れも尤には候へども、あながちに其取り納めの仕樣、合點參る物にて無御座候、馬屋の者、ばくらう抔に能くくせ馬を乘り候もの有之候、一々に馬術鍛錬致したるにても無御座候、又何程馬術鍛錬いたし候とも、馬も活物に候へば、くせの程位、たしかに知れ申候に極まりたる物にても無御座候、只氣遣の心つよく御座候故、どにかくに埒明き不申にて候、押し

こなし乘りつけ候へば、左迄の氣遣はなき物と申候事合點參る物に候、三度も五度もなげられ候心得にて無御座候てはくせ馬には乘られ不申候今時の人は人の過失を咎むる心つよく候故自分も過失なき樣にと存候是れにより使ひそこなふまじきと思召候御心故疵物の使ひにくき事被仰候にて御座候馬に乘りそこなふ人ならでは馬は乘り得ぬ事に候人を使ひそこなふ人ならでは人をば使ひ不得候云云人の使ひそこなひなき樣にと思召候は聖人に勝らんと思召候にて御座候大なる惑と可被思召候云云藥は皆毒にて候へども毒と名を付け不申候事は長所を用ひ候故に候云云其實は天地の間の物何によらず各長短得失御座候て其長處を用ひ候時は天下に棄物棄才は無御座候へども長處を御存知不被成候故短處にばかり御目つき申候て疵物と思召さるゝにて候人を用ひ候には其長處を取りて短處に目を付け不申候事聖人の道にて御座候（同上）

又曰く、

人は活物に候へば事に懸け候ふて見候へば今迄無之才智も出る物にて御座候兎角用ひて見不申候得へば聖人とても御存知無之候云云先づ長所を知りて後に用ひ可申存候はゝ人は用ひられ申間敷候用ひてならでは知れぬ物と可被思召候但し用ふるに就いて又次第御座候此方より指圖を致し候て使ひ候へば其人必ず其事にはまり不申候故十分の才能は出ぬ物にて候小々の過失をゆるし不申候へばたとひ指圖を致不申候共はまり無之物に候故に用ひざれば知らず候ゆだねざれば誠に用ふるにては無之候云云（同上）

尚ほ徂徠は政談卷三の中に最も精細に人を用ふるの法を論ぜり其言一々注意を惹くに足るものありと雖も二篇の長文なるを以て今悉くこれを引用すること能はず因りて左に唯其參考に資すべき重要の部分のみを摘記せん、

一

國を治むる道は人を知ることを第一肝要なる事とすること古より

聖人の道斯の如し、

二

人を知ると云ふ物は、兎角使ひて知ることなり、左はなくて我目がねにて人を見んとせば、畢竟我物好に合する人を器量ありと思ふことなり、是れ愚なる事の至極なり、

三

手前の目がねを手前の才智にて人の器量を知らんとするときは、必ず誤あることなりと知るべし、是れによりて人の器量を知ることは其人を使ふて見て其器量を知ること古よりの道なり、

四

人を使ふ道は、君の思召と何程違ひたりとも、此方より指圖をせずして、其人の心一盃に働かせて見て其の人の器量を知ることなり、其上にて功あるを賞し、功なきを退くべし、但し小過をゆるすと云ふことありて、小過を咎むれば、其人小過もなき樣にとする故、其才智縮んで働かず、心一盃に働くことならぬなり、心一杯に働かぬ時は其器量は見えぬなり、

五

少々の有餘不足ありて少々の仕落はなくて叶はぬことなり、少しの仕落を厭ひて大なる功を立て得ざれば、咎はなけれども功なし、功なければ、何の益かあるべき、大なる所に功あらば少しの仕落は少しの事なり、苦しからぬ事なり、

六

總じて少しの害を捨てねば大きなる功は立て難きものなり、

七

大なる功あるならば、小過は許さで叶はざる事なり、

八

樣々の惡弊と云ふは、人に身を陷み込ませぬ樣に仕掛くる事、是れ第一の惡弊なり、

九

聖人さへ過はあるなれば仕落は誰れもあることなり、

十

治世にても上へ物申すは下たる者の身には虎口同然の事なり身の危さは同じ事なり此情は下とならねば知らぬ事なり、

十一

上より才智を出だせば下の才智は出ぬものなり和して同せずと云ふ本文聖賢の奥義なる事を知らず下と才智の爭になる故上の威光に壓れて下の才智は引込むなり上たる人下と才智を爭ふは是れ上たる人長しき心なくて若輩なる事なり上は負ふて下を育つるは上たる人の無智なるにあらず、

十二

下を使ひ込みて其役に閊ちするときは其賢才の人顯はるゝ事なり、

十三

人の才智はいつも同じことなれども其事に閊らぬときは其人の才智の全躰にならぬ故其才智十分に顯はれぬなり能く此事に閊りて見れば全躰になる故才智の全躰出現する此妙所はわざをせぬ人は知らぬ事なり斯の如き道理にて人を知る道はやはり人を使ふ所にあり毛頭我使ひ樣のよきにて其人の才智生ずるにあらず、

十四

大概癖のある人に勝れたる人多きなり癖のある人が皆々勝れたる人なりと云ふことにはあらず一癖あるものに勝れたる人多きものなり是れによりて面魂一癖あるとて名將の左樣の人を賞翫したること多きなり聖人の書には是れを器と云ふ器と云ふ物は譬へば鎗はつく業計にて切るわざなし刀はきる業計にて突くわざ疎し錐は尖りてさいづちの役ならず木槌は鈍くして錐の役ならず總じて刄物は鞘に入れて置かねば怪我をする大なる癖あり是れ器なりされども其わざの能處は使ふて見ざれば知らぬものなり只見れば其片

輪なる處計が目に掛る是れ癖なり、されば癖あるものにあらざれば器と云ふ物にあらず器と云ふ者にあらざれば役に立たぬものなり人も其如し、

十五

名將は一癖あるものを好むなり、

十六

中庸に舜好問好察邇言と云ふは聖人も知らぬ處實にある故人に問ひ了簡を云はせて是れを用ひ人を其役儀に闘らせ其人の才智を一ばいに現すべき爲めの妙術なり下たる人の才智十分に現はれたる時賢才は知らるゝことにて古より國天下を治むるには唯一人を知るを智惠の至極とする故孔子も是れを大智と云へるなり唯一人を活して使ふと殺して使ふとの差別によりて賢才の顯はるゝと現はれぬとの替りありされば世末になるに隨つて上たる人の器量小さくなる故物を氣遣ふ小氣なる心强く癖ある人の内にして才智ある人を取り出たすことを知らず、

十七

賢才と云ふは一器量ある人を云ふ左樣の人は一癖ある人の中に多くは有るものなりと了簡して其人を役儀に闘むる樣に使ひ込むときは誠の賢才現はるべし、

十八

總じて人を疑ふべからず唯一人を取り出だし度と云ふ心なき故能き人は出でぬなり、

其他服膺すべき名言佳句少しとせず以上摘記する所百花園中偶眼を遮るものを選出するに過ぎざるなり徂徠が人を用ふる法に關する所論委曲周到にして多方面に渉れりと雖も其要點を擧ぐれば左の如し、

(一)人の長處は始めより知らんことを求むべからず之れを用ふれば長處始めて顯はる、

(二)人は唯其長處のみを取れば可なり其短處の如きは知るを要せず、

(三)能く用ふれば其時代の必要に應ずる程の人才は必ず之れあり、
(四)人は己れが嗜好に合するもの而已を採用すべからず、
(五)人才は必ず疵瑕あり、疵瑕なきは以て人才となすに足らず、
(六)人を用ふるに當りては小過は咎むるを須ひず、唯大功あれば可なり、
(七)用ふる以上は十分事を其人に委ぬべし、
(八)上たる人、下と才智を爭ふべからず、
(九)人才は必ず一癖あるものなり、是れ器なるが故なり、器ならざれば、用ふるに足らず、

徂徠は行政上人を用ふるを以て最も重大の事件となし、法制の如きは人の如くに重大なるものにあらずとせり、其言に云く、

法の立て樣を何程に宜しくしたりとも、其法を取扱ふ人なき時は、無益の物に成ることなり、(政談卷四)

又云く、

法よりは人猶ほ肝要にて御座候、たとひ法は惡しく候とも、人能く候へば相應の利益は有之ものに候、法計の吟味仕候て人惡しく候へば、何の用にも立ち不申候、又人に隨つて法は違ひ候ものに候、(答問書中)

是れ亦一見識なり、假令ひ法あるも之れを行用する人なければ、功を成さず、已に人あれば、法のいかんに拘はらず、功を奏すること疑なし、此れ徂徠が人を用ふるを以て重大の事件とする所以なり、彼れ又太平策の中に神道に就いて說をなして曰く、

神道と云ふことは卜部兼倶が作れることにて、上代に其沙汰なきことなり、

と、後世唱道する所の神道の古道にあらざることを斷言せり、然れども古道の存在を否定するの意にあらず、故に論じて曰く、

唯吾國の神道とも云ふべきことは、祖考を祭りて天に配し、天と祖考とを一つにして何事をも鬼神の命を以て取り行ふこと、文字傳はらざる以前よりのことなれども、是れ又唐虞三代の古道なり、

彼れ此の如く我邦の古道と支那の古道とを同一視し、其支那の古道を尙ぶが如く我邦の古道をも尙ぶの要を知れるが如し、彼れ乃ち曰く、

神道はなきことなれども、鬼神は崇ぶべし、まして吾國に生れては、吾國の神を敬ふこと、聖人の道の意なり、努々疎にすまじきことなり、

此れに由りて之れを觀れば、彼れ本と極端の拜外主義を懷くものなれども、亦國躰の尊重すべきを知らざるものにあらざること、推して知るべきなり、

## 第六　宋學論

徂徠は仁齋と同じく宋儒を以て佛敎の敎義を取り、孔子の道に背くものとなし、痛く之れを排斥せり、辨道、辨名、文集、答問書、太平策等の書に於て屢、宋儒を非議し、以て自家の主張を標榜することを務めたり、彼れ宋儒の學の佛敎に出づるを論じて曰く、

宋儒理氣の說は、佛家の眞諦假諦に相似候、天理人欲は、眞如無明に相似候、古は聖人賢人と云ふ名目は無之候、是れ又佛菩薩に相似候、道統の傳と申事、古は無之候、是れ佛家の血脈相傳に相似候、敎に知行を分つと申事、古は無之候、佛家には解行と申事有之候、豁然貫通と申事、古は無之候、禪家の大悟徹底に相似候、靜坐と申事、古は無之候、是れ又坐禪の眞似と被存候、（答問書下）

宋儒の說と佛說とを比較對照すれば、此の如き類似の點あること疑なし、又宋儒の佛說を假り來たれるものも、少しとせず、然れども宋儒の說の佛說と相似たるものあるを以て、悉く佛說に出づとするは非なり、世界及び人生の事、精細に攻究し來れば、期せずして自ら暗合することなしとせず、故に宋儒の說の如きも、佛說を假らずして、佛說と相似たるものなきを保せざるなり、尙ほ徂徠が宋儒と異なる所を擧げて之れを論ぜんに、宋儒は一身の修德を主とせしに反し、徂徠は功利主義を懷き、政治的見解を有せしが故に、道を論じて曰く、

聖人の道は專ら天下國家を治むる道にて、禮樂刑政の類皆道なり、（同上）

又曰く、

聖人の道は、至極の處、天下國家平治の爲めに建立なされたる事に候、身を修むる事の有之候も、身脩まらざれば、下尊信せずして道行はれざるゆゑ、君子は身を脩め候、(同上)

乃ち徂徠は脩身を以て治國の方便となせり、之れに反して宋儒が脩身を主とするを非として曰く、

たとひ何程心を治め身を修め、無瑕の玉の如くに修行成就候とも、下をわが苦世話に致し候心無御座、國家を治むる道を知り不申候はゞ、何の益も無之事に候、依是民の父母と申所より見聞き不申候はゞ、何程の金言妙句も、孔子の御相傳被成候、堯舜禹湯文武周公の道とは、雲泥萬里の相違にて御座候、聖人の道と佛老の道との分れめ、只此處と可被思召候、(答問書上)

尙は又聖人の道を論じて曰く

只我身ひとつを佛にも聖人にもなすといふ樣なる物ずきなる事にては無之と可被思召候、(答問書下)

宋儒を揶揄嘲弄すること此の如し、又宋儒の學の心法理窟に陷りて、風雅文采を失ひたるを非として曰く、

聖人の道は專ら國天下を治め候道に候、道と申候は、事物當行の理にても無之、天地自然の道にても無之、聖人の建立被成候道にて、道といふは國天下を治め候仕樣に候、扨聖人の敎は、專ら禮樂にて風雅文采なる物に候、心法理窟の沙汰は曾て無之事に候、宋儒以來わざを捨て理窟を先きとし、風雅文采をはらひ捨て、野鄙に罷成候、天子の道なる事を忘れ候より專ら道理を說き候て人を喩し候事を第一に仕候、(同上)

又一層痛快に宋儒の弊を道破して曰く、

後儒僅に能く精粗本末、一以て之れを貫くといふ而して其意の鄕往する所を察するに、則ち亦唯內を重んじ、外を輕んじ、精を貴び、粗を賤み、簡を貴び、要を貴び、明白を貴び、齊整を貴ぶ、此れより以往、先王の道、

藉りて以て衰颯枯槁し、肅殺の氣、宇宙に塞がる、(辨道)

是れ固より極端の言なりと雖も、宋儒が道德的工夫の一方に偏したることは疑なし、之れに反して徂徠が風雅文采を主張したるは大に好し、孔子の如きも、決して無風流なるものにあらず、晉に自ら磬を擊ち、瑟を鼓し、又能く歌ふのみならず、又禮を尙び樂を嗜み、詩を好むの心ありて、文雅風采饒(ゆたか)ならずとせず、然るに宋儒が文雅風采を捨てゝ、勃窣理窟を主とせしは、一方に偏せるものなること疑なし、故に徂徠が此の如き宋儒の弊を矯正せんとしたるには同情を寄せざるを得ざるなり、徂徠は宋儒と仁齋とを併せて之れを排斥すれども、仁齋が活動主義には少からざる賛成の意を表せり、彼れ曰く

仁齋の學、其骨髓、天地一大活物といふにあり、此れ其時流に踰ゆる、萬々なる所以なり、(蓼園隨筆卷之上)

又曰く、

仁齋先生活物死物の說、誠に千歲の卓識なり、(辨名下)

此の如く仁齋が活動主義を稱揚すると同時に宋儒の寂靜主義に反對せり、故に此點に關しては徂徠、仁齋と手を取りて宋儒に敵抗するが如きの看なしとせず、徂徠、宋儒の寂靜主義に反する自家の積極的見解を吐露して曰く、

彼の後世の君子、宋の諸老先生の若きものを觀るに、其學を語るや、務めて善を修めて惡を去り、天理を擴めて人欲を遏むるを言ふ、而して先王の敎、唯其善を導いて惡自ら消するを知らざるなり、其治を語るや、務めて君子を賞して惡人を罰するを言ふ、而して先王の道、唯仁者を擧げて不仁者自ら遠かるに在るを知らざるなり、其人を論ずるや、務めて其長短得失を備ふ、而して先王の道、唯其長を用ひて、天下棄才なきにあるを知らざるなり、(辨名上)

洵に卓見なりといふべし、宋儒は又性に本然氣質の二種ありとせり、仁齋已に之れを非として氣質の性のみを認容せり、徂徠亦之れを論じて曰く、

本然氣質の性と申儀得と詮議をつめ御覽可被成候畢竟氣質の性ばかりにつまり候事に候氣質を變化すると申事是れ又無理の至極に候(答問書下)

徂徠は此の如く獨り氣質の性のみを認容し、更に又一歩を進めて此氣質の性を以て不變化的のものとせり、是れ又宋儒の氣質變化を說くと正反對を成せる所なり、彼れ乃ち論じて曰く、

氣質を變化すると申候事は宋儒の妄說にて、ならぬ事を人に責め候無理の至りに候、氣質は何としても變化はならぬ物にて候、米はいつ迄も米、豆はいつまでも豆にて候、只氣質を養ひ候て其生れ得たる通りを成就いたし候が學問にて候、たとへば米にても豆にてもその天性のまゝに實いりよく候樣にこやしを致したて候ごとくに候しいなにては用に立不申候されば世界の爲めにも米は米にて用に立ち、豆は豆にて用に立ち申候、米は豆にはならぬ物に候、豆は米にはならぬ物に候、宋儒の說のごとく氣質を變化して渾然中和に成り候はゞ、米ともつかず、豆ともつかぬ物に成りたきとの事に候や、それは何の用にも立ち申間敷候や、又米にて豆にもなり、豆にて米にも用ひられ候樣にと申事に候はゞ世界に左樣なる事は無之事に候(答問書中)

是れ亦一種の見解なり、尙ほ此事に關しては前に擧げたる道德論の(四)氣質不變化の說と參看するを要するなり、宋儒が氣質變化といふは、米を變化して豆となし、豆を變化して米となすが如き種類の變化をいふにあらず、人の氣質の不善なるを變化して善となすことなるが故に、若し之れを米若くは豆に比すれば、米若くは豆の不良なるものを變化して良となすに當るなり、若し人を變化して獸となし、獸を變化して人となすといふが如き種類の變化ならば、米と豆との交互變化を以て之れを推論すべきも、是れ宋儒の主張する所にあらず、徂徠の比喩を誤れりといふべし、徂徠と宋儒との學說の異同を左に列擧せん、

徂徠　　宋儒

(一)古學を主張す　●古學にあらず(即ち理學を主張す)

| | |
|---|---|
| (二)功利主義を取る | 功利主義を取らず |
| (三)禮樂刑政を道となす | 理を道となす |
| (四)道は作爲に出づとなす | 道は本性に具はるものとなす |
| (五)氣質不變化をいふ | 氣質變化をいふ |
| (六)文雅風采を尙ぶ | 心法理屈を尙ぶ |
| (七)活動主義を贊す | 寂靜主義に陷る |
| (八)政治を主とす | 修德を主とす |
| (九)獨り氣質の性のみを立つ | 本然氣質の兩性を立つ |

(以上差異點の主要なるものを擧ぐ)

## 第七　仁齋と徂徠との學說の異同

已に仁齋と徂徠との學說を叙述し了はりたる以上は、一たび其學說の異同いかんを考察すること、蓋し無用の業にあらざらん、仁齋と徂徠との學說を比較對照するに共通點もあり、又差異點もあるなり、先づ左に共通點を擧げんに、

(一)仁齋も古學を主張し、徂徠も古學を主張す、……是れ確に一の共通點なり、然れども徂徠は古文辭によりて古學を修むるの要を論じ、仁齋は此に論じ及ばず、故に全く同一の古學とはいふべからず、但宋學を排斥して直に洙泗の淵源に接せんとするの一事に至りては、毫も異なる所なきなり、

(二)仁齋先づ活動主義を主張して、徂徠亦從つて之れに和す、……活動主義は仁齋が宋儒の寂靜主義に反して唱道する所にして、徂徠深く其卓見に服し、之れに贊同の意を表せり、

(三)仁齋唯氣質の性のみを主張し、徂徠亦然り、……仁齋も徂徠も宋儒の本然氣質の兩性を立つる二元論を非として、共に一元論を立つるものなり、

次ぎに差異點を擧げんに、

(一)仁齋は仁義を以て道となし、徂徠は禮樂を以て道となす、……仁齋と徂徠と同じく古道を復活せんとするも、道其物の解釋、大に同じからざるものあるなり、

(二)仁齋は古文辭の要を言はざれども、徂徠は古文辭を以て古學の階梯となせり、……徂徠の古學は此點より之れを言へば、古文辭學なり、之れに反して仁齋の古學は古義學とはいふべきも、決して古文辭學にはあらざるなり、

(三)仁齋は功利主義を非として、徂徠は功利主義を取る、……仁齋が功利主義を取らざるは、宋儒と同じ、徂徠公然と功利主義を標榜して起たず、然れども隱然功利主義を取るものなること到底否定するを得ざるなり、

(四)仁齋は道を以て自然に出づとし、徂徠は全く作爲に出づとせり、……仁齋は道の觀念に於て未だ徹底せざる所ありと雖も畢竟道を以て人爲を俟たず、天地自然に存するものとせり、即ち道を以て固有とするものなり、徂徠之れを否定して、道は先王の作爲を經て始めて存するものにて、自然にあらずとせり、

(五)仁齋は德性を尙び、徂徠は政治を尙ぶ……仁齋の尙ぶ所は寧ろ個人の私德なり、徂徠は私德を後にして、主として公德を尙ぶものなり、故に徂徠は仁齋の孤獨的なるに引き代へて、社會的なるの看なしとせざるなり、

(六)仁齋は窮理をなし、徂徠は窮理を取らず……窮理をなすの點より之れを言へば、仁齋も宋儒と異なる所なし、即ち天地理氣等の事に就いて自ら思索して究明せんとせり、徂徠は之に反して窮理の道を杜絕して、專ら古語學的研究に從事せり、是故に仁齋は徂徠よりは比較

的に哲學者の性質を有せるを知るべきなり、

(七)仁齋は聖人を學ばんとし、徂徠は聖人は學ぶべからずとせり……聖人を學ばんとせしは、獨り仁齋のみならず、宋儒も亦然り、徂徠獨り聖人たらんことを求むるの非を道破せり、

(八)仁齋は孟子を尙び、徂徠は孟子を尙ばず……仁齋は大學を斥け、中庸を疑ふと雖も、孟子は大に之れを尊信し、「孔門之大宗嫡派」となせり、徂徠は思孟を併せて之れを斥け、竊に荀子を尙ぶ者の如し、

(九)仁齋は仁義禮智を以て德の名とし、徂徠は然らず……徂徠は仁義禮智の中仁智は德にして、禮義は道なりとす、乃ち禮義は外部的にして先王の作爲に出づるもの、但し仁智は身に得る所あるをいふなり、

以上擧ぐる所は差異點の重なるものなり、徂徠、宋儒とあらゆる點に於て正反對に立ち、殆んど何等の共通點をも有せず、然るに仁齋とは少くも三種の共通點を有す、故に仁齋は徂徠と宋儒との間に立ちて橋梁の如き地位を占む、然れども仁齋は徂徠よりは寧ろ宋儒に近し、故に仁齋

欠

## 第九　徂徠門人

〔徂徠の子孫を除く〕

太宰春臺名は純、字は德夫、後に出だす、

服南郭、名は元喬、字は子遷、小字は小右衛門、南郭と號し、又芙蓉館と號す、姓は服部氏、自ら修して服氏となす、平安の人、南郭人となり、風流溫藉、藝苑の士、欽慕せざるものなし、寶曆九年江戸に沒す、年七十七、著はす所、南郭文集、大東世語、燈下書、遺契、文筌小言等あり、南郭の事蹟は先哲叢談卷之六、近世叢語卷之三、野史卷二百六十及び先哲像傳卷四等に見ゆ、南郭の義子、元雄、字は仲英、小字は多門、攝津の人、著はす所、蹈海集八卷あり、其事蹟は先哲叢談卷之六に見ゆ、南郭の門人としては、鵜殿本莊、石島筑波、莊田豐城、安達清河、山本友石、宮瀨龍門、新井滄洲、原田東岳、齋宮靜齋、湯淺常山、熊本華山、源乘富、望月三英、村松貞吉等あり、又龍門の門人としては、清水江東、宇野東山等あり、



欠

安藤東野、名は煥圖、字は東壁、小字は仁右衛門、東野と號す、姓は安藤氏、修して藤氏となす、下野の人、東野、周南と諸子に先ちて、疾く徂徠に歸す、就中東野最も肯綮を得たり、徂徠の終に海内に木鐸たる、東野實に之れを翼賛すといふ、惜らくは彼れ略血の疾を致し、享保四年を以て沒す、年僅に三十七、著はす所、東野遺稿三卷あり、南郭、東野の碑文を撰ぶ、又東野の事蹟は先哲叢談卷之七、近世叢語卷の三、野史卷二百六十及び先哲像傳卷四等に見ゆ、

山縣周南、名は孝孺、字は次公、小字は少助、周南と號す、姓は山縣氏、修して縣氏となす、周防の人、幼にして穎敏、常兒に異なり、殊に父良齋、周南を家庭に教ふること頗る嚴なり、毎日周南をして樓上に登りて書を讀ましめ、梯子を去りて下ることを許さず、是を以て群籍を博渉するを得たり、長じて徂徠に師事す、是時徂徠業未だ大に振はず、而して周南東野早く其門に及び、迭に翼をなす、是を以て徂徠大家を成すに及び、二子を待つもの、餘人に異なるものありといふ、延享二年、病を得、歳を經て已まず、凡そ薄にあること八年、實暦二年を以て終る、年六十六、著はす所、周南文集十卷、爲學初問五卷等あり、爲學初問一に談園談餘と題し、徂徠の著作とするは誤なり、南郭、周南の碑文を撰び、男泰恒、周南の行狀を撰ぶ、其他周南の事蹟は先哲叢談卷之七、近世叢語卷之一、野史卷二百六十及び先哲像傳卷四等に見ゆ、周南の門人に瀧鶴臺、增野雲門、林東溟、和智東郊、津田東陽、田坂濁山、山根華陽、三浦衛與、小田村鹿門、小倉鹿門、仲子岐陽、窪井鶴汀、田中相江等あり、就中東郊、鶴臺及び東溟の三子を周南門の三傑と稱す、

平野金華、名は玄仲、字は子和、俗稱は源右衛門、金華と號す、姓は平野氏、修して平氏となす、陸奥の人、人となり、滑稽疎狂、酒を飲んで、忼慨す、又、猫を愛すること甚しく、其飼養する所、十八頭に至るといふ、閑散餘錄卷之下に云く、

平子和初め醫を以て三浦侯に仕ふ、醫を業とすることを屑とせず、強ひて仕を致し、後儒を以て守山侯に仕ふ、時に月俸甚だ微なり、あ

る時五月五日の前に官長の曰く、五日には新しき葛衣を著て朝せられよと、その日に至りて婦人の服を著けて出づ、官長これを咎む、子和曰く、臣が如き微祿のものは、新衣を貯ふることを得ず、然りと雖も、官長の命に違ひ難し、細君が藏むる所やゝ新し、故を以てこれを著たりと、侯聞いて即日に月俸を增加せられしとなん、

其所行率ぬ此の如し、享保十七年を以て江戸に沒す、年四十五、著はす所、金華文集ありといふ、南郭、金華の碑文を撰ぶ、又金華の事蹟は、先哲叢談卷之七、近世叢語卷之三、野史卷二百六十、及び先哲像傳卷四等に見ゆ、金華の門に戸崎談園あり、

高蘭亭、名は惟馨、字は子式、蘭亭と號し、又東里と號す、本姓は高野氏、裁して高氏となす、江戸の人、幼にして徂徠に從つて學び、年十七にして暮となる、是れより專ら心を詩に潛め、遂に詩を以て家を成す、徂徠の門、詩を以て名あるもの、十數人、南郭を推して盟主となす、而して蘭亭最も晩出にして常に南郭に兄事す、幾もなく詩名之れと並び馳す、當時詩を言ふもの二家の門牆に倚らざるはなし、蘭亭、性善く酒を飲み、豪宕奇を好み、常に髑髏杯を擧げて飲をなす、ペイロンが髑髏杯を擧げたると一對の奇話たり、寶曆七年江戸に沒す、年五十一、蘭亭六たび娶りて遂に子なし、著はす所、蘭亭遺稿十卷あり、蘭亭幼より作る所の詩、萬有餘篇、病革なるに及んで、悉く之れを火に投ず、是に於て松崎君脩、稻垣穉明、谷文卿等相謀りて各〻嘗て私に錄する所のものを輯めて之れを世に刊行す、是れを蘭亭遺稿となす、蘭亭が事蹟は先哲叢談卷之八、近世叢語卷之三等に見ゆ、蘭亭の門人に横谷藍水、唐橋君山あり、

宇瀋、水名は惠、字は子迪、小字は惠助、瀋水と號す、本姓は宇佐美、修して宇となす、南總の人、年十七にして江戸に來たり、徂徠に師事す、然れども其塾にあること僅に三年にして徂徠沒す、故に未だ全く徂徠の旨を得るに至らず、因りて尙ほ研鑽己まず、之れを久うして學大に進む、瀋水篤く徂徠を信じ、力を盡して其遺著を校刻す、例へば四家雋右文矩、文變考、絕句解、絕句解拾遺、南留別志の如き、皆瀋水が校刻する所に係

る、其自ら著はす所の辨道考、辨名考、絕句解考證、絕句解拾遺考證の類亦皆徂徠の意を領會するを以て主となす、其徠門に功あること、高足の弟子と雖も及ばざる所なり、濟水安永五年を以て卒す、年六十四、服元立、濟水が碑文を撰ぶ、又濟水が事蹟は先哲叢談卷之八、續近世叢語卷之五、先哲像傳卷四等に見ゆ、

本多猗蘭子、名は忠統、字は大乾、猗蘭子と號し、又晩年拙翁と號す、伊豫守と稱し、神戸（かんべ）の藩主たり、徂徠集中西臺滕侯と稱するもの、是れなり、寶曆中に卒す、年六十七、著はす所、猗蘭臺集廿九卷及び其他古言錄、猗蘭子等數種あり、

餘熊耳、名は承裕、字は子綽、大内氏、小字は忠大夫、熊耳と號す、陸奥の人、彼れ自ら言ふ、其先百濟の明帝の太子餘琳より出づ、故に餘を以て本姓となすと、唐津侯に仕ふ、時人當今の于鱗と稱す、春臺、南郭、殁して、後、經義は、字子迪、松崎君脩と呼び、修辭は斯人のみを稱す、安永五年四月に殁す、年八十、著はす所、熊耳文集十六卷、仝後篇十二卷、熊耳遺稿十二卷等あり、其事蹟は先哲叢談卷之七及び續近世叢語卷之五に見ゆ、熊耳の義子闌室又職を襲いて唐津の儒官たり、熊耳の門人に岳東海、長坂圓陵、市川鶴鳴、中根君美、滕南豐、田中江南、石金瀨濱、岡道溪等あり、闌室の門人に又大竹麻谷あり、

三浦竹溪、名は義質、字は子彬、初の名は良能、通稱は平大夫、竹溪と號す、江戸の人、初め甲斐侯に仕へ、後、吉田侯に仕ふ、竹溪尤も志を經濟に留め律學に精し、寶曆六年五月に沒す、年六十八、著はす所、竹溪文集三卷及び其他數種あり、其事蹟は先哲叢談後編卷之五及び近世叢語卷之三に見ゆ、

鷹見爽鳩、名は正長、字は子方、通稱は三郎兵衛、爽鳩子と號す、三河の人、田原侯に仕ふ、爽鳩詩才逸宕にして、群衆に拔く、而して平生尤も故舊に厚し、又志を經濟の學に留む、貴紳甞て徂徠に問ふて曰く、「弟子の經濟に長ずるものを誰れとかなす」と、徂徠乃ち答ふるに爽鳩と竹溪とを以てし、稱して能く時務に通曉するものとなす、爽鳩享保二十年四月

を以て歿す、年四十六、著はす所、或問珍三卷、詩筌二卷、爽鳩遺稿一卷あり、其事蹟は先哲叢談後編卷之三に見ゆ、爽鳩の孫を星皐といふ、著はす所、數種の書あり、

越智雲夢、名は正珪、字は君瑞、雲夢と號し、又神門叟と號す、曲直瀬氏、養安院と稱す、江戸の人、幕府に仕ふ、雲夢の先は伊豫越智の裔なり、故に越智氏を冒し、又自ら修して越となす、雲夢、祖先の業を紹ぎ、醫を以て官に食むと雖も、平生甚だ方技の說を好ばず、反りて詞藻を以て專務となせり、彼れ人となり、質實謹厚、家人に對すと雖も、未だ嘗て聲色を厲うせず、其從僕奴婢、常に謂ふ、吾主人に於て見ざるもの三あり、曰く、慍顏を見ず、曰く、詰語を見ず、曰く、鄙吝を見ず、雲夢、延享三年三月を以て歿す、年六十一、著はす所、懷仙樓文集、神門餘筆等あり、服部南郭其墓碑を作る、南郭集四編卷之八に見ゆ、又其事蹟は先哲叢談後編卷之三に見ゆ、

秋元淡園、名は以正、字は子紳、小字は喜內、嶋夷と號し、又淡園と號す、岡崎侯の文學たり、著はす所、淡園初稿あり、

吉田孤山、名は有隣、字は臣哉、(一に作る巨哉)俗稱は孫兵衛、孤山と號す、森川侯の上大夫たり、蚤に徂徠に從學し、譯文筌蹄を校して之れを上木せり、

山井崑崙、名は鼎、字は君彝、崑崙と號す、通稱は善六、紀州侯の書室となる、享保十三年四月を以て歿す、著はす所、七經孟子考文三十二卷あり、此書支那に於て非常に珍重せられ、遂に阮元の鐫刻を經て、我邦にも舶來するに至れり、

釋萬菴、名は原資、芙蓉と號す、幼にして詩に巧なるを以て時人之れを文珠小僧と呼ぶ、後、徂徠及び南郭に學んで詩風を變ず、江戸の芝東禪寺(臨濟宗)に住し、元文四年を以て歿す、年壽未だ詳ならず、著はす所、江陵集、古今諸家人物志等あり、萬菴が門人に僧獨麟、龜井南冥等あり、

根本武夷、名は遜志、字は伯修、俗稱は八郎右衛門、武夷と號す、根本氏、自ら修して根となす、相模の人、山井崑崙と共に七經孟子考文を著はし、且つ論語皇侃義疏を校正上木す、先哲叢談續編卷之九に云く、

武夷嘗て山井崑崙と同じく下野の足利學に遊ぶ、七經を校勘して還る、七經とは詩書易春秋禮記論語孝經を言ふなり、蓋し我土傳ふる所の舊本を以て同異を標舉し、明版注疏の誤脱を刊正するものなり、其書、御覽を經、銀錠十枚を賞賜す、而して後、又經筵を講官物北溪に命じて、其遺漏を補葺せしむ、益すに孟子を以てす、總べて二百六卷、三十六本、題して七經孟子考文補遺といふ、蓋し徂徠の建言する所による、官之れを刻して天下に布く、享保十七年壬午の正月、長崎の尹をして之れを彼土に傳致せしむ、彼の清の仁宗嘉慶二年之れを飜刻し、稱して以て盛擧となす、其原皆崑崙武夷の手鈔する所に出づ、眞に不朽の業といふべし、

明和元年十一月に卒す、年六十六、其事蹟は先哲叢談續編卷之九に見ゆ、

板倉璜溪、名は安世、字は美仲、璜溪と號し、又帆丘と號す、通稱は安右衛門、江戸の人、弟經世と共に徂徠に師事す、著はす所、帆丘集八卷あり、文會雜記卷之三下に云く、

美仲文集は帆丘遺稿とて十卷ばかりもあり、美仲增上寺門前廣小路に家をかり、舌講してありけるとなり、大言のみ云ひけれども、南郭をば赤羽先生と云ひけるとなり、美仲歿後文集梓行覺束なしと仲龍云へり

其事蹟は近世叢語卷之五に見ゆ、

石川大凡、名は之清、字は叔潭、默齋と號し、大凡山人と號す、通稱は重次郎、江戸の人、幕府に仕ふ、著はす所、大凡山人集八卷あり、

田中蘭陵、名は良暢、字は士舒、蘭陵と號す、小字は武助、江戸の人、富春叟（即ち田晉）の甥なり、田中氏、自ら修して田となす、蘭陵は、板倉、帆丘、山田、麟嶼、岡井、鰊州と共に、菱社妙年の四傑と稱せらる、而して蘭陵尤も其魁たり、享保十九年に卒す、年三十六、著はす所、蘭陵集あり、服部南郭其碣を作る、南郭集二編卷之八に見ゆ、

岡井鰊州、名は孝先、字は仲錫、鰊州と號す、通稱は郡大夫、讃岐侯の記室た

り、

山田麟嶼、名は正朝、後に弘嗣と改む、字は大佐、麟嶼と號す、初め徂徠に學び、後、東涯に學ぶ、事は東涯門人の處に詳なり、

柴山鳳來、名は博我、字は子文、鳳來と號す、本姓は木戸氏、武藏の人、松平伊豆侯の世臣、晩年職を辭して遺叟と號す、明和八年に歿す、年八十、其事蹟は續近世叢語卷之一に見ゆ、鳳來が子豫章、亦徂徠の學を奉ず、明和四年、父に隨つて京師に游び、病に罹りて歿す、年三十八、鳳來の門人に室重明あり、

匹田九皐、名は進脩、字は子業、九皐と號す、羽州の人、莊內侯に仕ふ、元文三年五月を以て病歿す、年三十九、春臺其碑陰を作る、

晁玄洲、名は文淵、字は涵德、玄洲と號し、又玉壺山人と號す、通稱は甚右衛門、本姓は朝比奈氏、自ら修して晁氏となす、尾藩の世臣たり、

晁南山、名は泰亮、字は君采、南山と號す、通稱は賴母、本姓は朝比氏、自ら修して晁氏となす、河內狹山侯の大夫、致仕の後、用拙齋と稱す、南山集を著はせり、

久津見華岳、名は義治、字は京國、小字は吉左衛門、華岳と號す、姓は源氏、三河の人、苅谷侯の世臣たり、其事蹟は近世叢語卷之六に見ゆ、

木下蘭皐、名は實聞、字は公達、一の字は希聲、蘭皐と號し、又玉壺眞人と號す、通稱は宇左衛門、姓は木下氏、自ら修して木となす、尾張の人、尾藩の世臣たり、嘗て曰く、謂ふに天下の事は、曲藝小技の最も下なるものと雖も、必ず學んで後之れに通ず、而るを況や已れを修め人を治むるの道に於てをや、今の士大夫、苟も其道を學ばず、徒に已れが智力を以て、衆庶を制御し、自ら之れを臆に斷ずるは、譬へば猶ほ有力の曾て射御の術を學ばずして、彎强を好み、悍馬に騎るがごとし、以て射れば激發し、以て御すれば風逸す、其能く命じて正鵠に中たり、衝轡を接せんと欲するも、豈に之れを得べけんや、今の君長たるもの、此れに類するもの多し、世、射御の以て學ばざるべからざるを知りて、已れを修め人を治むることの以て學ばざるべからざるを知らず、亦惑へるの甚しき

ものなり」と、寶暦二年八月を以て病歿す、年七十二、著はす所、玉壺吟草四卷、附錄一卷、客館瑯槃集二卷、蘭皐遺文六卷等あり、其事蹟は、先哲叢談續編卷之七に見ゆ、

辻湖南、名は敏樹、字は稷卿、湖南と號す、江州辻村の人、故に辻を以て姓となす、本姓は源氏、丹波笹山侯に仕ふ、

伊藤南昌、名は元啓、字は進迪、南昌と號す、通稱は一藺、

木村蓬萊、名は貞貫、字は君恕、初め嶺南と號し、後、蓬萊と號す、通稱は勝吉、姓は木村氏、自ら修して木となす、尾張の人、勝山侯に仕ふ、蓬萊資性直諒にして、獨在の時と雖も、皎然として自ら欺かず、其經義を講ずるや、譬を取りて說明し、言語明爽、中江藤樹の人となりに似たり、故に至愚の人と雖も、其旨意を領悟し、師德を仰慕するに至る、蓬萊常に曰く「白鷗水にありて悠然として浮び清閑自得し、而して其足躁擾少しも息ふることを得ず、是れを以て其性を失はず、人の世に處するも、亦此の若きのみ」と、又嘗て曰く「己れ不善にして人之れを譽む、以て喜となす、に足らず、己れ善にして人之を毀る、以て憂となすに足らず」と、彼れ又慈善に厚し、彼れ少き時、家貧うして常に十日の食なし、然れども來たりて門外に立ち、食を乞ふものあれば、米櫃を傾倒して之を施與せり、彼れ紀平洲と交はれり、彼れが徂徠に學びたるは幼少の時の事なれば、彼れが德行は徂徠に學べるにあらずして、寧ろ友人の感化に本づくならん、彼れ明和二年十月を以て江戸に歿す、年五十一、著はす所、玉壺詩選二卷、蓬萊詩稿四卷あり、其事蹟は先哲叢談後編卷之五及び續近世叢語卷之一に見ゆ、

土屋藍洲、名は昌英、字は伯曄、藍洲と號す、豐前中津の人、詞章を以て稱せらる、延岡侯に游事し、尋いて祿を辭し去り、後又醫術を以て、小倉侯に仕ふ、其事蹟は近世叢語卷之五に見ゆ、

守屋義眉、名は煥明、字は秀緯、義眉山人と號す、江戸の人、大垣侯に仕ふ、初め東野に學ぶ、東野歿して後、徂徠に學ぶ、寶暦四年に歿す、年六十二、服部南郭其墓碑を作る、南郭集四編卷之八に見ゆ、又其事蹟は近世叢語

卷之四に見ゆ、

菅谷甘谷、名は晨燿、字は子旭、通稱は小膳、甘谷と號し、又南嶠と號す、初め堀氏、徂徠集に屈子旭又は南嶠秀才といへるもの、是れなり、江戸の人、大坂に住し、專ら師說を唱ふ、大坂の地、物氏の學を唱ふるもの、斯人より起るといふ、寶曆十四年に歿す、年六十餘、著はす所、南嶠園集、甘谷遺稿あり、甘谷の門人に橋本樂郊あり、

入江南溟、名は志圃、字は子園、通稱は幸八、南溟と號し、又滄浪居と稱す、武州の人、終身仕へず、南溟の門人に熊坂台州あり、

芳村天仙子、名は恂益、字は慄夫、一の字は謙受、天仙子と號し、又五雨亭と號す、少うして軼才あり、學問淵博、京の北山に退居し、終身著述を以て業となす、徂徠稱して「好學君子之醫也」といへり、著はす所、內經綱紀醫學正名等數種の書あり、

大野北海、名は通明、字は子詰、北海と號す、通稱は忠右衞門、奧州の人、兵學を以て家を爲す、蓋し鈐錄の世に行はるゝ、斯人徂徠の兵學を奉ずるに由るといふ、著はす所、北海文集あり、

小田村鄜山、名は公望、字は望之、一の字は士彥、小字は伊介、周防鄜郡の人、幼にして明秀、善く詩を作る、世、稱して神童となす、十二歲にして周南の門に遊び、十七歲にして江戸に之き、徂徠に從つて學ぶ、徂徠其文を賞して「雕虎の才ありとい」ふ、明和三年を以て歿す、年六十四、其事蹟は續近世叢語卷之六に見ゆ、

板倉蘭溪、名は淳行、字は敬德、蘭溪と號す、通稱は助三郎、帆丘が兄なり、

板倉龍洲、名は經世、字は美叔、龍洲と號す、通稱は經之丞、帆丘が弟なり、

谷元淡、字は大雅、郡山侯の儒臣たり、

田中冠帶、名は喜古、冠帶老人と號す、通稱は邱愚右衞門、後に兵庫と改む武藏の人、幕府に仕ふ、冠帶蚤に神童の名あり、彼れ弱冠の時より常に志を富國强兵の術に留め、嘗て謂ふ「財は聚むるに難からざるなり、取予能く當たれば、國富む、方は施すに難からざるなり、賞罰能く正しければ兵强し」と、享保十四年に歿す、時に年六十八、著はす所、民間省要廿

卷、治水要方二卷、冠帶筆記四卷あり、其事蹟は先哲叢談續編に見ゆ、

宇野士朗、名は鑒、字は士茹、後の字は士朗、小字は兵介、宇野氏、自ら修して宇氏となす、士新が弟、平安の人、年僅に三十一にして士新に先ちて卒す、遺稿五卷ありといふと雖も、世に傳はらず、其事蹟は先哲叢談卷之四に見ゆ、

住江滄浪、名は昭猷、字は君徽、通稱は萬之允、滄浪と號す、享保十三年を以て歿す、年三十八、其事蹟は肥後先哲事蹟卷一に見ゆ、

中根東里、名は若思、字は敬夫、東里と號す、通稱は貞右衛門、伊豆の人、嘗て徂徠に學ぶ、然れども後、陽明學に歸す、事は「日本陽明學派之哲學」に詳なり、又其事蹟は先哲叢談後編卷之五に見ゆ、

篠崎東海、名は維章、字は子文、東海と號す、篠崎氏、通稱は金五、江戸の人、徂徠、東海の人となりを愛し、屢〻其學術を稱す、故に春臺南郭等之れに眷顧せざるはなし、後、麟嶼と共に東涯に學ぶ、東海元文四年七月を以て歿す、年五十四、著はす所、三十餘種あり、其事蹟は先哲叢談續編卷之六に見ゆ、

以上列擧せる門人の外、松崎白圭、釋大潮、成島錦江、越智平菴等、皆護園の徒にして、殆んど門人の列にあり、委しく徂徠學派の處に見ゆ、

# 第十　徂徠關係書類

物徂徠自記年譜
徂徠事蹟
徂徠先生墓碣及誌
南郭文集
春臺文集
紫芝園漫筆
先哲叢談〔卷之六〕
先哲年表
近世叢語〔卷之一〕
茅窓漫錄
間合早學問
正學指掌附錄
武門諸說拾遺〔卷之十九〕
拙堂文話〔卷一〕
日本詩史〔卷之四〕
二老畧傳 細井九皐著
儒學傳
文會雜記
閑散餘錄〔卷之下〕
先哲像傳〔卷三〕
素餐錄
斯文源流
學問源流
儒學源流
北窓瑣談
埋木花

八水隨筆
一言一話
江戸名所圖會
假名世說 大田南畝著
筆疇 原東岳著
讀書會意〔卷中〕 澁井太室著
野史〔卷二百六十〕
日本諸家人物志
古今諸家人物志
近世大儒列傳〔上卷〕 內藤據案著
藝苑叢話〔上卷〕 山縣篤藏著
日本名家人名詳傳〔上之卷〕
荻生徂徠一卷 山路彌吉著
日本儒林譚〔下卷〕
鑒定便覽
名家全書
近世名家著述目錄
慶長以來諸家著述目錄
大日本人名辭書
大日本史料原稿一卷
日本德育史傳
讀史論集 山路彌吉著
日本倫理史稿
日本哲學要論 有馬祐政著
伊物二氏の學案 島田重禮○哲學雜誌第八十八號及び第九十三號
ホッブスと徂徠 加藤弘之○東洋哲學第二編第一號
仁齋徂徠學術の同異 內藤恥叟○東洋哲學第三編第二號
徂徠學の話 島田重禮○學士會院雜誌第十七編之十

孔子の道と徂徠加藤弘之○學士會院雜誌第十六編之七

教育家としての荻生徂徠杉山富槌○教育學術界第一卷第二號乃至第十號

○以下徂徠學を駁擊せるもの

論語考六卷宇明霞著

辨道解蔵二卷石川麟洲著

古學辨疑二卷富永滄浪著

非物篇六卷五井蘭洲著

非徵八卷中井竹山著

閑距餘筆一卷寫本○仝上

非徂徠學一卷蟹養齋著

辨復古一卷同上

非辨道辨名一卷森大年著

非物氏一卷

燃犀錄一卷



讀書正誤一卷石川香山著

桂館漫筆一卷原雙桂著

讀辨道一卷鷲井昭陽著

正學指掌一卷尾藤二洲著

講學編二卷唐崎廣陵著

物學辨證二卷仝上

# 第十一　徂徠學派即ち護園學派

徂徠の徒は德川時代に於て爾然たる一大學派を成せり、是れを徂徠學派といふ、又是れを護園學派ともいひ、又古文辭學派ともいふ、此學派の影響の偉大なる、恐くば堀河學派の及ぶ所にあらざらん、假令ひ徂徠が學に短處の指摘すべきもの、少からずとするも、亦其人格の尋凡ならざりしこと、此れによりて以て推測するを得べきなり、徂徠唯一女あり、因りて兄伯達の子道濟を養ふて嗣となし、女を以て之れに妻はす、道濟、字は太寧、小字は伊三郎、後、惣右衞と改む、金谷と號す、柳澤侯に仕ふ、平生退證以て己れを律し、人と競ふことを好まず、門に至るものあれば、經義は春臺に問ひ、文章は南郭に問ふべしといひ、敢て自ら名父の子といふを以て居らず、故に其造詣を知るもの稀なり、安永五年九月を以て歿す、年七十四、其著述として近代名家著述目錄に三十三種を擧げ、續諸家人物志に三十五種を擧ぐ、此れに由りて之れを觀れば、亦以て名父の子たるに愧ぢずといふべきなり、金谷が子を鳳鳴といふ、名は天祐、字は順卿、鳳鳴は其號なり、惣右衞と稱す、柳澤侯の記室たり、文化四年十二月を以て歿す、年五十三、著はす所、鳳鳴遺稿あり、徂徠が弟を北溪といふ、名は觀、字は叔達、小字は惣七郎、殿中侍講となる、寶曆四年を以て歿す、年八十五、著はす所、七經孟子考文補遺の外十有餘種あり、（慶長以來諸家著述目錄を見よ）北溪の子を青山といふ、名は彥卿、通稱は是三郎、後、惣七郎と改む、享和元年五月を以て歿す、文會雜記卷之三下に云く、

物叔達の子は才學あり、子貢詩傳の字缺を補ひ、板行すべしと云ふ中に沒すとなり、仲龍語れり、

誠に惜むべしとなす、金谷が子孫も、北溪が子孫も、名聲次第に墜ち、今は閑として聞ゆることなし、或は云ふ、荻生氏の苗裔を荻生傳と稱し、現に四谷大番町に住せりと、然れども復た言ふに足るものあるなし、徂徠が門人、果して其幾千百人なるを知らずと雖も、其著名なるは、四十有餘名に過ぎざるなり、就中春臺、南郭、周南、東野、萬庵、金華、濟水、最も卓絕せり、之

れに徂徠彼れ自身を加へて護園の八子といふ、徂徠直接の門人の呉、當時護園の徒たりしもの、亦少しとせず、今其重もなるものを擧げんに、

板倉復軒、名は九、字は惇叔、小字は九郎右衛門、復軒と號す、本姓は板倉氏、自ら修して板となす、江戸の人、幕府に仕ふ、復軒本と業を木門に受くと雖も、屢〻徂徠と交はり、其子をして皆徂徠に學ばしむ、享保十三年を以て歿す、年六十四、其事蹟は先哲叢談後編卷之三に見ゆ、

松崎白圭、名は堯臣、字は子允、白圭は其號なり、通稱は左吉、江戸の人、篠山侯に仕ふ、其執政たるや、白圭職に居り、衆に臨むに、專ら君恩を宣べて、臣節を勵まし、廉隅を砥し、名分を正うし、偏頗を杜ぢて、賄賂を絶つ、是に於てか士風大に振ふ、委しくは東涯門人の處に見ゆ、白圭の子に觀海あり、釋大潮、名は元皓、字は月枝、肥前松浦の人、龍津寺〔黄檗宗〕に住す、徂徠の門に於て詩名、萬庵と相齊し、護園能文の士、皆死して後、獨り大潮、南郭と、東西に屹立し、聲名殆んど相頡頏す、明和五年を以て歿す、年九十三にして寂す、大潮著はす所、魯寮文集二卷あり、其事蹟は近世叢語卷之四に見ゆ、

大潮が門人に高暘谷、龜井南冥等あり、

成島錦江、名は鳳卿、一の名は信遍、字は歸德、一の字は子陽、姓は成島氏、自ら修して島となす、道筑と稱し、錦江又芙蓉道人と號す、陸奥の人、少うして江戸に來たり、徂徠の說を喜び、又和歌を善くす、寶曆十年九月に歿す、年七十二、其事蹟は先哲叢談卷之七に見ゆ、錦江の門人に奥貫友山あり、

越智平庵、名は正球、一の名は正珍、平庵は其號なり、又同齋と號す、其事蹟は皇國名醫傳卷之上に見ゆ、鑒定便覽〔卷下〕に平庵を以て「徂徠門」とすれども、未だ其果して然りや否やを知らず、然れども其子雲夢をして徂徠に學ばしむるを以て之れを觀れば、其護園の徒たりしや疑なし、

水足屏山、名は安直、字は仲敬、肥後の人、

水足博泉、名は安方、字は斯立、平之進と稱す、幼にして敏慧、人皆神童と稱す、屏山が子なり、享保十七年十月を以て歿す、時に年僅に二十六、其事蹟は肥後先哲事蹟卷三に詳かなり、

滕鳳湫、名は俊明、字は彥遠、鳳湫は其號なり、又老鑿生と號す、通稱は彥八、

江戸の人、尾府に仕ふ、鳳湫一たび徂徠を見るに及ばずと雖も、其說に信服し、中年の後修辭を是れ務む、故に蘐園の徒にして之れと交はるもの多く、名聲頗る著はる、明和二年十月を以て歿す、年七十、其事蹟は先哲叢談續編卷之九に見ゆ、

孔生駒、名は文雄、字は世傑、生駒山人と號す、日下氏、通稱は眞藏、河內の人少壯にして群書を涉獵し、强記人に絕す、初め家庭に學び、專ら性理を修め、後、徂徠の學を私淑し、好んで古文辭を作り、李王の說を唱ふ、寶曆二年を以て歿す、年四十一、其事蹟は先哲叢談續編卷之八に見ゆ、

菅沼東郭、名は行、字は大簡（一說に名は大行、字は子簡）通稱は文庵、東郭と號す、江戸の人、徂徠の學を私淑して浪華に敎授す、寶曆十三年十二月を以て歿す、年七十四、著はす所、大學闡、東郭文集、鳳鳴集、論語徵疏等あり、其子西陵あり、

鈴木澶洲、名は渙卿、字は子煥、小字は嘉藏、澶洲と號す、姓は鈴木氏、自ら修して木となす、江戸の人、初め篠崎東海に學んで徂徠の說を私淑す、博洽を以て聞ゆ、安永五年六月に歿す、年六十二、著はす所、澶洲山人文集の外數種あり、

赤松太庚、名は弘、又之れを通稱とす、字は毅甫、太庚山人と號す、其先播洲の人、太庚に至りて江戸に住し、徂徠の學を私淑し、敎授して以て業となす、其學、經義を以て專門となす、明和四年四月に歿す、年五十九、著はす所、九經述、家語述、赤草子あり、太庚當時の芙蓉社諸子の歌詩に耽るものを厭ひ、之れと交はることを欲せず、曰く、

名譽は人の賊なり、喧傳は德の賊なり、模擬剽竊、吟哦を精思するものは、抑、亦詩の賊なり、

太庚常に名敎を以て己れが任となし、其自ら信ずること甚だ厚し、王侯貴人、禮を厚うして之れを招くと雖も、敢て之れに應せず、乃ち曰く、

我れ豈に四方髦俊の士を得て之れを敎育し、各〻其德を成し、各〻其材を達し、以て各をして其國家の用に供せしむるに若かんや、

人皆其志を高しとす、太庚人となり、敦厚にして縝重、絕えて浮躁粗豪の氣なし、蓋し春臺以外蘐園一派中稀に見る所の德行家なり、其事蹟は先

哲叢談後編卷之五に見ゆ、

山内琴臺、名は廣邑、字は士英、長門藩貴戚の老、毛利廣規が次子なり、延享三年を以て病歿す、時に年僅に二十三、其事蹟は續近世叢語卷之三に見ゆ、墨定便覽卷下に「徂徠門」とすれども、徂徠に親炙せしにはあらざるなり、

松村梅岡、名は延年、字は子長、梅岡と號す、通稱は多仲、姓は松村氏、自ら修して松となす、江戸の人、天明中に歿す、年五十四、著はす所、駒谷雜言、樵者述旨等數種あり、其事蹟は續諸家人物志に見ゆ、

龍草廬、名は公美、字は子明、草廬と號す、通稱は彦二郎、伏見の人、彦根侯に仕ふ、文藝を以て家を成す、然れども操持堅からざるを以て其弊少しとせず、彼れが吟社を幽蘭社といふ、人之れを指笑して遊亂社となす、又富永滄浪が古學辨疑を剽竊して、名詮典詮の二書を著はし、磨滅すべからざる醜名を流せり、彼れ寛政四年二月を以て歿す、年七十八、著はす所、草廬文集、同詩集等數種ありと雖も、世之れを稱するものあるなし、

是等は皆徂徠と同時代に生存し、其學を崇拜し、若くは其感化を受けしものなり、近世叢語卷之二に云く、

徂徠歿するに及んで其門分れて二となる、詩文は服部南郭を推し、經術は春臺を推す、

以て徂徠死後に於ける護園學派の景況を知るべきなり、徂徠死せりと雖も、其門人及び門人の門人等數多にして餘勢、俄に衰ふることなく、一時海内を風靡せんとせり、殊に享保より天明に至るまで凡そ五六十年間最も隆盛の狀を呈せしなら、んか、文會雜記卷之三上に云く、

徂徠學にて世間一變すと、然れども徂徠一生間は人半信半疑を今の世文物の開けたるを見せませば、さぞ悦ぶなるらめ、但今の時復古と云ふこと俳諧にまで出で、さて〳〵復古に聞きわきたる人々のはめきにさはくまで、輕浮の中のことなり、

是れ天明元年を以て歿せる湯淺常山が叙述する所なり、又學問源流に徂徠學の景況を論じて云く、

徂徠學享保の初年には江戸に專ら行はれ其餘は江戸にて其學を習ひ其國に歸りて其說を唱ふる人稀にあり其中にも關東は多しと謂ふべし京都には東涯の學盛にして徂徠の學は新奇の說なりと云ふ人はあれども學ぶ人は甚だ少なし其後漸々に徂徠の說に從ふ人多くなり遂に關西九州四國の邊まで盛にして東涯の學をする人次第に衰ふ況や闇齋の流をする人は絶えて稀なり唯少年の時より習熟せる一二の古老宿轍を改めざるのみにして習ふ人とてはなし元和寬永の比の風は言ひ出だす人もなく云云徂徠の說享保の中年以後は信に一世を風靡すと云ふべし然れども京都にて至りて盛んにありしは徂徠歿して後元文の初年より延享寬延の比まで十二三年の間を甚しとす世の人其說を喜んで習ふこと信に狂するが如しと謂ふべし

又云く、

寶曆初年の比より稍々に徂徠の學を疑ふ人多く專ら學ぶ人少なく、



云云、

と兎に角天明に至るまでは徂徠の學なかゝりしなり然れども天明中に至りては護園の弟子大抵皆凋落し盡きて其遺敎を維持するもの僅に市川鶴鳴岳東海及び東藍田あるのみ是に於てか其勢力漸く將に地に墜ちんとす而して其反動は已に天明に先ちて起れり例へば片山兼山井上金峨の徒は已に天明以前に折衷學を唱道して大に護園の學を排斥せり是に於てか其聲に應じて起れるもの殆んど指を屈するに遑あらざらんとす天明以後に至りては山本北山龜田鵬齋太田錦城等大に李王の古文辭を掊擊し中井竹山亦非物非徵を刊行して極力之れを觝排することを務めたり蓋し世人の漸く古文辭を倦厭するの時に際し徂徠に快からざるもの一時反抗の氣燄を揚げ遂に時勢の一轉機を促すに至れり朱明の世に於て歸震川袁仲郞艾千子の輩が李王に反抗して起りしが爲め李王の弊全く一洗せられたるが如く山本北山龜田鵬齋太田錦城等起りて古文辭の弊を痛論せしが爲め護園

の餘燄頓に熄み學界大に面目を一新するを得たり、山本北山が袁仲郎を崇拜せしが如きは、固より反對の極端に走りしものなるが故に、是れ亦幾もなく古文辭と共に廢れ、韓柳歐蘇の文章廣く世に行はるゝに至り、學は寛政異學の禁以來獨り朱子學のみ、教育主義として勢力を有し、復た各學派の自由競爭を見る能はざるに至れり、然れども天明以後と雖も、間、徂徠を仰慕して起れるものあるを見る、例へば、齋藤芝山、龜井南冥、岡野石城、野田石陽、龜井昭陽、及び、藤澤東睦の徒の如き、是れなり、

齋藤芝山、名は高壽、字は權佐、世、熊本侯に仕ふ、年二十四にして始めて學に志し、徂徠が答問書を讀んで、聖人の教の治國の道たること、を知る、乃ち憤然として其道を學ばんと欲す、然れども僻邑に居りて師友の資なし、是を以て獨り樓上に坐して生米を食ひ、晝夜意を經書に刻し、其義を研味して敢て樓を下らず、年三十九、贊を委して業を問ふものあるに及んで、徂徠が復古學を主張せり、文化五年を以て歿す、年六十六、其事蹟は近世叢語卷之二に見ゆ、

龜井南冥、名は魯、字は道載、筑前姪濱の人、幼にして澤大潮に學び、後、浪華に游んで醫を永富獨嘯庵に學び、遂に長州に遊んで山縣周南に謁し、專ら徂徠の學を信じ、之れを筑前に唱ふ、天明以來徂徠の學、大に衰ふと雖も、尚ほ關西に其聲價を墜さゞるもの、主として南冥の力によるといふ、文化十一年を以て歿す、年七十二、著はす所、論語々由の外、十有餘種あり、其事蹟は續近世叢語卷之一に見ゆ、

岡野石城、名は元韶、字は叔儀、石城と號す、通稱は内藏太、松代の藩士、人となり、溫藉沈毅、洽聞多識、初め菊池南陽に從ひ、濂洛の教を奉ず、後、蘐園の說を得て感悟する所あり、悉く舊學を棄てゝ之れを學ぶ、文政十三年を以て歿す、年八十六、著はす所、凡そ十餘部、五十餘卷あり、其事蹟は日本教育史資料卷五に見ゆ、

野田石陽、名は孝彝、字は叔友、小字は吉右衛門、石陽と號し、又靈星閣と號す、松山藩の人、學を好み、蘐園の教を奉ず、文政年間に歿す、年六十、其事蹟は、日本教育史資料卷五に見ゆ、

龜井昭陽名は昱字は元鳳通稱は是太郎昭陽と號し又空石と號す南冥の子なり天保七年を以て歿す年六十四著はす所蒙史周易考尚書考等三十有餘種あり其事蹟は續近世叢語卷之一に見ゆ。

藤澤東畯名は甫字は元發東畯と號し塾を泊園社といふ浪華の人元治元年を以て歿す年七十二著はす所東畯文集十卷あり土屋鳳洲之れが序を作りて曰く、

先生幼にして學を好む母氏敎育法あり學既に成り帷を浪華に下し、大に物子の學を倡ふ蓋し物子歿して百年其學漸く晦く先生興るに及んで復た世に明かなり、

東畯又嘗て「徂徠物先生贊」を作る云く、

聖人之道降爲儒乎先生出而道始道矣儒者之敎變爲禪乎先生出而敎始敎矣宇猶宙也萬里夏兮先生合而置之宙猶宇也千歲邈兮先生貫而操之嚮焉者背焉者皆浴厥膏譽焉者毀焉者孰窺厥奧（東畯先生文集卷之九）

東畯此の如く徂徠を尊崇すと雖も、其文章の如きは、必ずしも古文辭といふにあらざるなり、子南岳あり、

土井聱牙名は有恪字は士恭聱牙は其號なり伊賀の人伊勢津藩に仕ふ、明治十三年を以て歿す年六十四著はす所聱牙遺稿十五卷聱牙齋存稿三卷等あり、彼れ自ら護園派を以て標榜せずと雖も、亦頗る之れに類似するものあり故に此に附記す、楓井純彼れが行狀を作りて曰く、

大悟宋明學者之弊以爲胥失聖人之旨從是唾棄不講焉其終身所崇奉則韓文公而喜清儒考據之說本邦諸儒獨取物徂徠然亦不妄從識解往々超駕之蓋自是卓然創一家學矣、

此れに由りて以て其學風を知るべきなり、彼れ嘗て「謁韓祠記」を作りて曰く、

夫子の未だ生れざる夫子より前に夫子なし夫子方に生れて夫子を外にして夫子なし夫子已に逝き夫子に紹ぐに夫子なし夫子は聖者か何ぞ千古の更に夫子なきや惟是の故に道孔孟より高うして人知

らず、文、六經に過ぎて人信せず、夫子靈あらば其れ斯言を聽くに庶からん、云云、彝牙遺稿卷之八）

韓昌黎を以て孔孟に優れりとすること、亦奇矯の論といふべし、

芝山、南冥、石城、石陽、昭陽、東峻等歿してより復た護園の學風を紹いて起るものなく、徂徠の系統、是に於てか全く終結を告げたりといふを得べきなり、

# 第二章　太宰春臺

## 第一　事蹟

徂徠の門下、才學を以て顯はるゝもの、其人に乏しからずと雖も、道德を以て自ら任ずるもの、獨り太宰春臺あるのみ、春臺、名は純、字は德夫、小字は彌右衛門、春臺は其號なり、又紫芝園と號す、信州飯田の人、父言辰兵法を以て飯田侯に仕ふと雖も、亦好んで書を讀む、故に春臺先づ家庭に於て教育を受くるを得たり、彼れ自ら曰く、

純が先君子嘗て中江氏の學を好み丞純等が爲めに熊澤氏の賢を稱す、純、齠齔より其語を習ひ聞く、云云（復備前湯淺之祥書）

此れに由りて之れを觀れば、彼れが蚤に江西派の影響を受けたることを推して知るべきなり、彼れ又春臺獨語に己れが事蹟を述べて曰く

我父母ともに和歌を好みし故に、八九年の頃より三十一字をつらぬるすべを知り、十歳より十二三歳迄に腰をれの歌、凡そ三四百首讀み

たり、師もなく、友もなければ、歌よみたればとて人に見する事もなく、書き付けて藏し置きたるのみなり、其時心に歌に讀みうべきものとのみ思へり、十四五歳の時、始めて詩といふものを學びて、稍〻七言絶句などを綴るすべを知り、其時愚心ひそかに思惟せしは和歌を學びて、たとへ上手に成りたりとも、公家の人々を越ゆる事なるまじければ、いつも公家の下にかゞみなんも口惜し、詩は公家の敎を受くまじければ、上手にさへなれば公家をも弟子とすべし、此道に於ては天下に恐るゝ所あるまじ、いざ歌よむ事をやめて、詩を作る事を習はゝやと思ひ定めて、書き付け置きたる和歌の反故を悉く燒き捨て、一首もとゝめず、夫れより詩を好みてひたすら學習し、廿年を經て、漸く詩の道を明らめたり、

長じて中野撝謙に從つて程朱の學を修む、既にして徂徠の一家言を成すを聞き、其學を棄てゝ、蘐園の徒となる、文會雜記卷之一下に云く、

春臺初めて徠翁に對面して詩文を出して見せられたる時、足下は詩文既に一家をなせり、經學を修したまへと云はれたり、一見して其人の長を知ること徠翁の長なりと君修かたれり、

又先哲像傳卷三に一奇話を傳ふ、云く、

春臺始めて徂徠に對面のとき、其才を窺はん爲め、扇面へ釋迦老子並び立ちて孔子半伏の貌を圖して徂徠に贊を請ひければ、筆を取りて「釋迦釋空老子談虛、孔子伏笑」と書けり、春臺來翁の才窺ふべからざるを喜び、遂に弟子となりしとぞ、

兎に角春臺一たび徂徠に謁してより其才學に悅服し、乃ち就いて業を受け、古學を主張す、彼れ曰く、

純等少年より宋儒の書を讀んで心中に疑を生じ、其後伊藤氏の說を聞いて、又半信半疑なりしに、徂徠の說を聞いて、頗る信を起せしかども、一旦には疑網解けざりき、總しで少き時より、老莊の書、又は釋氏諸家の說までをも講究し、又其後博く諸子百家の書を讀んで、取捨斟酌し、三十年の歳月を歷て、年五十に近くなりて、從來の學問、融會貫通し、

天下の道、胷中に醞釀して、堯舜禹湯文武周公孔子の道吾が眼にこれを視ること、青天に白日を懸けたるが如く、今に至りては毫末の疑もなし、(聖學問答卷之上)

是れ其古學に歸して、見解の遂に定まれるを謂ふ、然れども彼れ又同、徂徠に慊焉たらざるものあり、晩年に及んで、稍〻一家の見を立つるも、詩文り、延享四年五月を以て卒す、年六十八、春臺子なし、阿武氏の子定保を養ふて嗣となす、定保字は徵孺、春臺著はす所、聖學問答二卷、辨道書一卷、春臺文集二十卷、紫芝園漫筆八卷、六經畧說一卷、斥非二卷、文論一卷等二十有餘種あり、

春臺人となり、峭刻にして邊幅を修め、徂徠の如く襟度宏量なること能はず、乃ち徂徠を評隲すること一再ならざるなり、(徂徠の事蹟及び學風の處を參看せよ)其言往々師の品性を損傷するものあり、彼れが門人としては、稻垣白島、五味釜川、宮田金峰、渡邊蒙庵、栗原桶川、僧無相、大鹽竈渚、井上東溪、原尙賢、堤有節、松崎觀海、釋曉山等あり、觀海の門人には又太田南畝、菊池衡岳、金谷玉川あり、玉川の門人に伊東藍田あり、

春臺嘗て「自嘲」の作あり、云く、

傑然清世一遺民、浪跡江湖似隱淪、冉冉頹齡同犬馬、翩翩才調逐風塵、居恒簡傲思狂者、遲暮寒微背故人、扣角康衢夜歌罷、可憐英氣鬱經綸、

亦以て其人となりを想見するに足るなり、

春臺は算術に長じ、又音樂に巧なりき、殊に笛を吹くに於ては妙を得、且つ舞樂をも能くせりといふ、文會雜記卷之三下に

春臺は甚だ算數の理を窮められたり、

と云へるに由りて彼れが徂徠の算術に通ぜざるに比して大に異なる所ありしを知るべきなり、近世叢語卷之三に云く、

太宰春臺善く笛を吹く、日光王音律を好み、之れを聞かんと欲し、人をして之れを召さしむ、春臺辭して曰く、臣は道を講ずるものなり、薄技を奏し、宴樂に供すること能はざるなり、若し我れを復びするものあらば、吾れ其れ笛を破り、復た音を操らざらん、

又彼れは琴曲の事に精はしかりしと見え、文會雜記卷之下に左の如く言へり、云く、

上野君則語りけるは、春臺琴のことに付き、御尋有之度旨、井上河内守殿御指紙を以て春臺を召さる、春臺曰く、予は樂人に非ずとて出でずして、日を經て河内守殿の邸に至りて、純は樂人にて候はず、それゆゑ樂のことは、得不申上候、文學のこと御尋成され候はゞ可申上候とあり、河内守殿用人も尤なりと云ひしとぞ、

彼れが人となりも、亦此れに由りて想見すべきなり、文會雜記に又云く、

春臺は舞樂をせられたり、辻氏より免許狀をもらはれたり、諸子集の時、舞衣は沼田侯賜はりたるがありしとなり、

彼れが性質の峻嚴なるに拘はらず、此の如く美術上の嗜好ありしは、其稱揚すべき所にして、又徂徠の斷じて及ばざる所なり、又彼れが平素の行狀に就いて一顧を價するものあり、文會雜記卷之一下に云く、

春臺は至りて精力のつよき人ゆゑ、明日のことを今日しまひ置かるるものなり、それゆゑいつも從容として居られたるとなり、

又云く、

春臺は至誠を積みたる人ゆゑ、家人を化したること奇妙なり、皆聖人の如く思へりとなり、

又曰く、

春臺は元來性の急なる人なれども、學問にてねりつめて從容としてをることを習ふて久しきにたふることを得るものなり、それゆゑ會業などの日、外より來たる狀などを書くこと隨分ゆる〳〵書かれたり、すべてその如くにて一生の間うろたへたることを見することなしと元鱗など語れり

此れに由りて之れを觀れば、他の蔭園の徒と違ひ、春臺は蚤に修養して自得する所ありしなり、彼れ又醫を業とせしこともあり、文會雜記卷之一下に云く、

春臺は京に浪人して居られたる時、少しの間醫になられたるゆゑ、醫

理をばよく知られたるとなり、

其他彼れは又書を能くせしを思へば、其學問技藝の多方面に渉れること、決して尋常ならざるを知るなり、

## 第二　學說

春臺晩年に至りて稍〻一家の見を立つと雖も、其學說の大躰は徂徠のそれを敷衍せるものに過ぎず、聖學問答、辯道書及び文論の三書は春臺が其學說を叙述せし所にして、此れに由りて彼れが見解いかんを知るべきなり、徂徠が禮樂を重んじて人の心術を問はざるの旨意を春臺一層敷衍して之れを論じ、推して極端まで至れり、彼れ乃ち聖學問答の中に論じて曰く

凡そ聖人の道には、人の心底の善惡を論ずること、決して無き事なり、聖人の敎は、外より入る術なり、身を行ふに、先王の禮を守り、事に處するに、先王の義を用ひ、外面に君子の容儀を具へたる者を君子とす、其人の內心は如何にと問はず、（聖學問答卷之上）

又德の外面的なるを明言して曰く、

聖人の敎は、衣服を最初とす、內心は如何にもあれ、先づ君子の衣服を

着せて、さて君子の容儀を習はし、次ぎに君子の言語を教へ、それより漸々に君子の德を成就せしむるなり、德といふは別物にあらず、衣服容儀言語の凝りかたまりたる者なり（同上）

更に又君子の定義を下だして曰く、

内心は如何にもあれ、外面に禮義を守りて犯さぬ者を君子とす（聖學問答卷之下）

是れ眞に人に僞君子たることを敎ふるものなり、心中邪惡の念を包藏し、唯外貌をのみ矯飾して禮に合する者の如きは「ヒポクリット」の標本に過ぎず、豈に此れを以て眞君子となすを得んや、春臺本と道德を以て自ら任ずるの念あるもの、若し藤樹、仁齋若くは益軒の如き良師に就いて道の眞相を窺ふを得ば、此の如き無趣味破廉耻の言をなさゝりしならん、然れども道德上嚴肅ならざる靉園の弊風に染まりしが故に、遂に此に至れること、亦惜しからずや、彼れ又曰く、

天性にてなす事は、何事も表裏なく、内外洞徹して一致せる者なり、天性とは、人々の生れつきたる本性なり、何事も敎を待たず、習に因らず、勉强を用ひず、無心無念にて天然自然にてなす事は、皆天性のしわざなり、是れを名づけて誠といふ、中庸の旨なり（聖學問答卷之下）

是れ今日の所謂本能主義と異なる所なし、何んとなれば、天性を以て本能を意味するものとすれば、天然自然になす所即ち本能の然らしむる所は、理性の要求によりて或る程度に制限せらるべきものなり、是れ天然自然を桎梏するの意に出づるにあらず、反りて其れをして健全なる範圍に歸せしむる所以なり、古人の所謂誠とは豈に春臺が言ふ所の如きものならんや、殊に中庸には愼獨を說く、是れ心中より徹底せる誠意によりて始めて成し得らるべきものにて、決して天然自然のなす所に任せて期し得べき所にあらざるなり、彼れ又論じて曰く、

聖人の道には、心中に惡念起りても、能く禮法を守りて、其惡念をそだてず、身に不善を行はざれば、君子と申候、心中に惡念の起るをば罪とせず候（辯道書）

此に至りて春臺は殆んど邪道に陷れり、單に惡念を有すると、其惡念を遂行するとは、罪の輕重、之れありと雖も、惡念を有すること、道德上、豈に罪なしといふを得んや、假りに古人が惡念を有することを許したりとするも、今は其非を痛論して、眞君子の意義を定むるの抱負なかるべからず、然るに全く古人を誤解し、僞君子を以て唯一の君子となし、公々然と之れを主張するとは、抑、又何たる事ぞや、馬太傳第五章第廿八節に、

惟我れ爾に語ぐ、凡そ婦を見て慾を懷ふものは、則ち中心已に之れと淫す、

といへるは、心中の罪を問ふものにて、利刃を以て咽喉上に擬するが如し、凡そ道德上の觀念は此の如く嚴厲急切なる處あるにあらざれば、何等の効力もあるものにあらず、若し心中にて種々なる惡事を想像し、此れを以て其習慣とせば、早晩其行爲とならざること、豈に難しとせざらんや、徂徠已に窮理を取らず、春臺亦窮理を非とす、其言或は徂徠より甚しきものあるが如し、彼れ乃ち論じて曰く、

窮理は聖人の所爲なり、凡の學者の及ぶ所に非らず、（聖學問答卷之下）

又曰く、

凡の學者に窮理を敎ふるは、大に非なり、（同上）

尙ほ此旨意を一層委しく叙述して曰く、

聖人すら不測とのたまひ置きたる事を、後世の學者として、これを測りて其理を知らんとするは、大に愚なる者なり、縱ひ其理を窮め得て、かくあらで叶はぬ事と言ひ出だせりとも、何を證據として、誰れかこれを信ぜんや、無益無用の事なり、（同上）

是れ聖人を置いて他に眞理の標準あるにあらずとするものにて、抑、又己れが知力を侮るの甚しきものなり、春臺己れが安身立命を說いて曰く、

日本の佛者の中に、一向宗の門徒は、彌陀一佛を信ずること專らにして、他の佛神を信ぜず、如何なる事ありても、祈禱などすること無く、病苦ありても、咒術符水を用ひず、愚なる小民、婦女奴婢の類まで、皆然な

り、是れ親鸞氏の敎の力なり、今純は一向宗にあらざれども、孔子を信ずること、彼等が彌陀を信ずる如く、鬼神に遠ざかりて、祈禱祭祀せざること、全く一向門徒の如し、室中に先父母の神位を設け、神牌を立て、歲時朔望に奠獻するのみにて、更に神像佛像を安置せず、宅に方寸の護符を貼せず、身に一封の護符を佩びず、厄難に遭ふといへども、神咒を誦し、佛名を念ずること無し、念誦の恃むに足らざることを知れる故なり、凡そ人は、一生に一たび死せざること無し、何事にて死するも、死するは、死するなり、生ある者の常にて、定まれる事なり、其中に、人は首領を保ちて地に歿するを上とす、古の君子の願ふ所なり、然れども義に當れる事には、首領を保つことを得ずして死するも、命なり、命盡きざるほどは、必死の地に居ても死せず、命盡くれば、耆婆扁鵲が禁方にても、生身の不動觀音の加持にても、活かすこと能はず、若し祈禱加持にて、厄難を除き、死を免るゝ者ならば、天命は尊ぶに足らざるなり、死生の變のみにあらず、一切の禍福吉凶榮辱升沈貴賤貧富皆然なり、かくの如く達觀通知して、毫髮も疑惑することなきを、知命の君子といふ、純は知命の君子に非らず、至愚陋劣なること、只一向門徒の如し、是れ純が安身立命の一つなり、次ぎに色欲は、人情の重き者なり、財利は、人の離れがたき者なり、飲食は、人の生命を養ふ者にて、一日も無くて叶はぬものなる故に、男女と並べて、人の大欲なりと、禮運には云へれども、飢渴の時に、何にても飲食して、飢渴止みぬれば其上には太牢の滋味、醍醐の妙味にても、貪る心なし、腹に限量ある故なり、財利の欲は限なき者にて、富める上にも富を願ふは、人の常の情なり、俗諺に、長者富に饜かずといふは、虛語に非ず、されば色欲と財利とは、防がなくて叶はざるものなり、聖人これを知ろしめして、禮義の敎を立て、民の淫佚を防ぎたまふ、禮義を以て民を制するは、堤坊の水を防ぐが如くなる故に、禮義を坊に譬へたり、男女の欲は、人の大欲にて、是れを縱にすれば、禽獸と異なること無き故に、婚姻の禮を制し、男女の別を嚴にして、人の淫亂を防ぎたまふ、自己の妻妾に非ずして、他に淫するを非

禮とす、釋氏は一向に夫婦を絶し、男女の欲を禁じて、身に其事を行せざるのみならず、心中に其念を起すをも罪とず、聖人の道には、他の婦女を見て、心に美女なりと思ひ、其色を悅んでも、身に非禮を行はざれば、禮を守る君子とす、以禮制心とは是れをいふなり、(聖學問答卷之下)

是れ固より春臺一輩の解釋なり、以禮制心といふことはありても、心中何等の惡事を念ふても君子たるに妨なしといふことは、孔子の曾て敎へざる所なり、春臺が所謂聖人の道は、不潔を蔽ふて知らざる爲をするけしからぬ道にて、又其所謂君子は僞善者に過ぎざるのみ、彼れ尙ほ論じて曰く、

心を制すといふは、只其心の欲を、思ふまゝに遂げざるをいふ、釋氏の如く、一向に念を起さしめざるには非ず、釋氏の道は、生きたる人を死人にする道なり、至りて難き事なり、先王の道は、釋氏に比すれば、甚だ行ひ易し、財利には義不義あり、義に當れば、千金の賜萬鍾の祿をも受く、不義に當れば、一束の芻一臠の肉をも受けず、以義制事とは、是れを

いふなり、義といふは、先王の義なり、吾人の自己の心にて料簡する義には非ず、先王の義は、禮の中に存するなり、釋氏は人に布施の行を勸めて、施す者さへ有れば、多少に拘はらず、義不義を論せず、無緣の財を受く、是れ利欲に便なる道にて、先王の道に比すれば、甚だ行ひ易し、然れども先王の道には、義を守る者を君子とす、此道を知らざる者をば咎めず、一たび此道を聞いてより義を好み不義を惡む心生じて、おのづから釋氏の道の易きを羨まず、又釋氏の義不義を論ぜずして、人の施しを受くるは、易き樣なれども、主ある財を見て、手を出しては盜まされども、心に其財をほしく思へば、是れを貪欲心と名づけて罪とす、貧を惡み富を欲するは人情なるに、是れを抑へて其念を起さゝるは、甚だ難き事なり、是れ却て吾道に無き事なり、吾道の敎は、以義制事といひて、只先王の義を以て、事の上を制して、放逸にせざるのみにて、心の內を責めざる故に、實は行ひ易きなり、然れば以義制事、以禮制心といふ、仲虺の言を受用すれば、色欲も財利も、此身を沈溺すること能はず、是

れ純が安身立命の二つなり、純が安身立命かくの如し、此外はいふに足らず、富貴は固より願なれども、求めて得べきにあらざれば心を絶して求めず、少き時は、身の不才を知らずして、名を求むる心ありしが、名も成らずして年ふりぬ、近來は虛名の無益なることを悟りて更に求めず、今は却て名の成らざるを幸とす、天性疎拙にして、權貴の人に近づく道を知らず、只今一二の諸侯貴人の召を蒙むるは、皆思ひよらざる値遇にて、我れより、求めたるに非ず、冉々として春秋を送り迎ふる内に、五十の年を過ぎて、老境に入りぬれば、壯年の時の客氣も去り、心中の風波も定まるに近し、此後又如何なる事が有りて、大なる蔽惑の出來らんも知らざれども、今に於ては、孔子の道に少しも疑はしき處なく、青天白日の如くなれば、老莊楊墨より以下、諸子百家の道、釋氏の諸敎、神仙の方術、宋儒の性理、王氏の良知、西洋の天主敎、日本の三元神道、此等の種々の雜說、八面より蜂起して、惠施が辯舌、孟賁が勇力、盜跖が暴戾、西極の化人の幻術を以て、萬方曉諭すとも、吾が守る所を變ぜしと思ふのみなり是れ又純が安身立命なり（同上）

春臺は又凡そ學者の工夫に三字の要訣あるとをいひ、乃ち一に、信、二に斷、三に勤を以て三字の要訣とせり、又彼れが學說の特色とも見るべきは聖學問答の中に痛く孟子を攻擊して寧ろ告子に左袒せる處にあり、彼れ橫說竪說、孟子の急處を衝く、其得意想ふべきなり、彼れ又孟子論二篇を作りて孟子を評論せり、（斥非の附錄及び文集後稿卷の八を見よ）

彼れ又文論七篇を作りて古文辭の弊を通論せり、其第二篇の中に古文辭を目して糞雜衣となし、且つ論じて曰く、

苟も古人の體と法とを得て、以て辭を修せば、今言と雖も、猶ほ古言のごときなり、是れを我れより古を作すといふ、故に善く辭を屬するものは、これを古人に取りて、而して、これを己れが口より出だし、讀む者をして其古辭たることを覺らざらしむ、此れ其文理條貫、倫あり、要あるを以ての故なり、

春臺が此見解、反りて徂徠のそれに優れり、又彼れ「徂徠先生遺文」の後に

書して曰く、

徂徠先生命世の才、絶倫の識を以て、古道を發明し、先王の道、仲尼の敎をして千歳の下に彰明ならしむ、其功これより大なるはなし、然れども其人奇を好むの癖あり、而して又近世古文辭家の言を悅ぶ、故に其爲る所の文、法度の外に出づるを免れず、云云、

と、洵に當れり、古文辭の弊は天明以後に至りて山本北山、龜田鵬齋、太田錦城等之れを痛論せしと雖も、春臺已に先鞭を着けたりといふべきなり、

## 第三　春臺關係書類

春臺先生墓碑　服部南郭
春臺先生墓誌　稻垣白島
春臺先生行狀　松崎觀海
先哲叢談（卷之六）　原念齋著
近世叢語（卷之二）　角田九華著
先哲像傳（卷之四）　原德齋著
野史（卷二百六十）
文會雜記　湯淺常山著
先哲年表
近代名家著述目錄
慶長以來諸家著述目錄
埋木花

儒學源流
古今諸家人物志
日本諸家人物誌
日本儒林譚（卷下）
儒林姓名錄
大日本史料原稿一卷
鑒定便覽
名家全書
日本名家人名詳傳
名家手簡
儒林傳　澁井大室著
大日本人名辭書

## 結論

古學は文學復興（即ちルネッサンス）の結果として起れる研究にて、畢竟直に蹤を孔子に接せんとする向上的進修に外ならず、蓋し文學復興によりて、我邦の學者が一時に後世の學問の妄謬を看破せるに本づく、是れ獨り儒教に就いて然か言ふべきのみならず、又醫學に就いても、又國學に就いても、亦復古の精神あらずといふことなし、醫學に於ては後藤艮山、山脇東洋、吉益東洞の徒、復古を倡へ、國學に於ては、荷田春滿、賀茂眞淵、本居宣長の徒、復古を倡ふ、恰も其の如く儒教に於ては、山鹿素行、伊藤仁齋、物徂徠の徒、復古を主張せり、是れ我邦思想發展の順序に於ては確に一歩を進めたるものなり、此の如き復古の學を總稱して古學といふと雖も、或る意味にては寧ろ新規の學なり、尾藤二洲が「仁齋徂徠之徒皆自稱古學、所謂古者、不從程朱之名耳、其說皆新奇無謂、何古之有」（素餐錄）といふも、亦之れが爲めなり、少くも其宋儒以來の弊風を一掃して洙泗の淵

源に溯るの要を喝破せるが如き、豈に新規ならずとせんや

然れども古學は終局のものにあらず、其故いかん、孔子は固より聖人として認容すべく、永く後人の品性修養上に裨益する所あるべけれども智は孔子に盡き、德は孔子に盡きたりといふを得ず、假令ひ實際智と德とに於て孔子に優ること能はずとするも、其寫象する所は孔子の智德より優るものあるなり、換言すれば、理想として孔子より優れる人格を構成するを得るなり、素行、仁齋、徂徠の徒が、宋儒の人物と學問とを批評して、更に之れより高且つ大なる理想を構成するを得しは、稱揚せざるを得ざる所なれども、何故に同一の精神を以て孔子の人物と學問とを批評せざりしか、今日よりして之れを言へば、孔子の人物と學問との如きも、宋儒のそれと同じく批評すべき點多々之れあるなり、孔子も後生可畏といへり、是れ後生の進歩測るべからざるを豫想して道破する所なり、然るに果して後生畏るべかりしや否や、若し孔子を盲信して崇拜を事とする以上は何の畏るべき所かある、夫れ智と德とは、孔子の私す

る所にあらず、孔子の人物及び學問の如きも、容赦なく之れを批評し、孔子でふ特殊の人格以外に理想的の智と德とを追求すべきなり、凡そ學は眞理を研究するを目的とす、眞理は孔子より貴し、故に眞理によりて孔子を批評するを是とし、孔子の言によりて眞理を論定すべきにあらざるなり、要するに學としては孔子に復歸するよりは、寧ろ眞理を究明して之れによるべきなり、若し事此に出でば、必ず儒教の範圍を超脱して、思想獨立の端緒を開き、國民哲學の基礎を成すを得べからしならん、然るに素行、仁齋、徂徠の徒が、比較的に批評的の精神あるに拘はらず、單に孔子に復歸するに止まりて、遂に其れ以上に出づること能はざりしは、遺憾なり、

古學派の人は徂徠一派を除くの外は、皆孔子を以て理想となし、品性を修養して孔子の如くならんことを希望せざるはなし、徂徠聖人たらんことを學ぶの非を論ずれども、亦聖人の道を發揮するを以て任となす是れ亦直に蹤を孔子に接せんとするものなり、素行といはず、仁齋とい

はず、徂徠といはず、古學派の人の眼中にありては、人格として孔子より偉大なるはなし、是を以て均しく復古を期せしなり、然れども今日にありて之れを思へば、偉大なる人格は、獨り孔子に限らず、又釋迦あり、基督あり、ソクラーテス氏あり、其他カントダーウヰン等の諸氏あり、試みに是等の人格を比較考察せば、必ず其長處短處あるを發見せん、故に是等數多の偉大なる人格に就いて其長處を抽象し、打ちて一塊となし、以て理想的の人格となすに若くはなし、史的人格は、如何に偉大なるも、必ず何等かの短處あり、然れども史的事實として、之れを變更すること能はず、但理想としては、此の如き短處を除き、思惟し得らるゝ丈圓滿なる人格を構成するを得るなり、孔子の聖人たるは、固より否定すべからざるも、其科學思想を有せざるが如き、其權利思想を有せざるが如き、又其自由進歩の念に乏しきが如き、又其論理思想と哲學思想に乏しきが如き、之れを理想的人格に比すれば、皆缺點として算へざるを得ざるなり、若し一向專念、孔子を崇拜し、孔子を以て唯一の理想とし、動作云爲、悉く之れに法らんと欲せば、必ず其短處を併せて、之れを模倣し、滔々相率ゐて因襲俗を成し、遂に復た陋習を打破すること能はざるに至るべきなり、儒教の行はれし結果として、東洋文明が總べて其缺點を實現し來たれること、今は餘りに顯著なる事實となれり、此れに由りて獨り孔子のみを以て今後の理想的人格とするの不可なること推して知るべきなり、若し古來の史的人格中に就いて之れを論せば、孔子の如く缺點の寡少なるものは、殆んど他に發見すること能はざるべし、然れども之れを抽象して構成せられたる理想的人格に比すれば、亦缺點の指摘すべきもの多々之れあるを見るなり、

抽象的觀念に乏しきものは、具躰的の理想を要す、具躰的の理想を要する以上は、孔子の如き史的人格を取るより外なきなり、然れども孔子の如き史的人格を以て唯一の理想とする時は、徒に過去を回顧して、保守的退歩的となり易し、孔子の如き人格を實現せんとするに當りて、其實現せらるべき情態は、理想として尙ほ將來にあれども、其實現せんとす

る理想は過去の史的人格なり是故に一意其理想とする過去の史的人格に近寄らんとし其結果は進歩的にあらずして必然に背進的となり後世にありては何人も其投ぜられたる境遇時勢等孔子のそれと同じからざるが故に孔子の如くなると能はず唯僅に孔子に似寄りたる處あれば理想の幾分をか實現せりとすべきのみ此の如くなれば古代に超絶して前進するが如きは思ひも寄らざるなり支那文明の進寸退尺月を追ひ歳を逐ふて墜落沈淪せしもの實に此に淵源すといふべきなり理想は抽象的にして將來にあるべきものなり是れを理想的の理想となす抽象的の理想は過去の史的人格の長處を集め新に我頭腦中に描出せるものなり此の如く描出せられたる理想は固より過去にありしことなし唯我頭腦中にあるのみ故に之れを實現するは唯將來にあるのみ然れども理想は認識と共に進化し經驗と共に發展するが故に之れを實現し了はるの時機あることなし若し之れを實現し了はれりとすれば進化發展は終結とならん然れども之れを實現するの時機あることなきが故に進化發展に際限あることなし換言すれば理想は過去にあるにあらずして未來永遠にあるなり唯未來永遠にある理想のみ以て最高最大の理想となすべきなり此れに由りて之れを觀れば古學派の見解の倒逆せること眞に火を觀るよりも明かなり

然れども尚ほ一の注意すべき點あり何ぞや仁齋は四端と四德(即ち仁義禮智)とを分ちて四端を内部的とし四德を外部的とし四端を充養して四德に合一するを得とせり然るに並河天民は四端と四德とを合一し四端は即ち四德四德は即ち四端分ちて二となすべからざるを論ぜり天民の見解は孟子の旨意を得たるものにして仁齋の見解は孟子の旨意を得たるものにあらず故に孟子の四端四德の說の解釋としては天民是にして仁齋非なり是れ固より論を俟たざる所なり然れども若し孟子を離れて之れを論ぜば仁齋已に稍深遠なる倫理上の問題に接觸し來たれるが如し彼れが内部的とするものはカント氏の所謂格法Maximeに相當し彼れが外部的とする者はカント氏の所謂道德的理法

Moralische Gesetze に相當す、而して此兩者は背反 Antinomie にして畢竟合一せざるべからざるものなり、(委くは kritik der praktischen Vernunft S. 119. を見よ)凡そ道德的行爲を創始する本源に就いて、古來是れを內部的とするものと外部的とするものと、二種あり、其內部的とするものは、即ち自律 Autonomie を根柢とし、其外部的とするものは他律 Heteronomie を根柢とす、然るに仁齋は自律と他律とを調和せんとするが如き傾向あり、換言すれば、道德上の背反 Antinomie を除去せんと努力する者の如し、天民は四端と四德とを合一し、論理上の撞着は一掃し得たりと雖も未だ道德上の背反を除去し得たるものにあらず、徂徠は獨り他律のみを認容し、自律他律の關係いかんには、曾て思ひ及ばざるなり、故に道德上の背反 Antinomie に關する問題は、仁齋によりて開始せられたりと雖も、未だ解決せられずして殘れり、然るに明治の今日となり、倫理學研究の漸く起らんとするに及んで、自律他律の議論、亦將に騷然として學界を動かし來たらんとす、道德てふ事實は獨り自己のみに關するものにあらず、又均しく自己以外の同類に關するものなり、自己と自己以外の同類とは現象として差別せらるれども、過境的實在よりして之れを觀れば、本と何等の撞着もあるなし、是故に自己にあるものは、亦同類にもあり、同類にあるものは、亦自己にもあり、主觀的に自己にある道德は客觀的に同類にある道德と合一するを要するなり、其合一する所、卽ち人道の因りて存する所なり、思ふて此に至れば、仁齋の着眼、殆んど燃犀の明、ありといふべきなり、

日本古學派之哲學終

學者は多く學びたるものなり、天才は誰れよりも學びたることとなく、人類反りて之れより學ぶもの なり、是故に大精神は億兆の人類中、僅に一人を生ずる位稀なるものにて、人類の燈明臺なり、若し是れなしとすれば、人類は恐るべき謬見及び蓉風の無際限海に漂ふべし、

シャベンハウエル



# 附錄一

## 堀川學派系統（其重なるものを記す）

- ∴伊藤仁齋
  - ∴伊藤東涯
    - 伊藤梅宇
    - 伊藤介亭
    - 伊藤竹里
      - 内田頑石
    - 伊藤蘭嵎
      - 立松東蒙
    - 並河天民
    - 中江岷山
    - 北村篤所
    - 小河立所
    - 淺野文安

荒川蘭室
林義端
中島訥所
瀨尾用拙齋
香川修庵
大町敦素
鳥山見庵
渡會末茂
伊藤好節齋
笠原雲溪
松崎蘭谷
並河誠所
鶴田重定
陰山東門





荒木田霽雲
桂川浚泉
林景範
三重松庵
松岡恕庵 — 小野蘭山
大石良雄
小野寺秀和
中島源造
稲若水
伊藤東所 — 伊藤東里
奥田三角 — 川田東岡
青木昆陽 — 倉成龍渚
澤村琴所 — 伊藤東峯
山田麟嶼

安原霖寰　伊藤韜齋
垣内熊岳
原雙桂
朝枝玖珂
谷麋山
穗積能改齋
陶山南濤
廣瀨一峯
松波酊齋
三谷南川
原東岳
宮崎筠圃
木村鳳梧
安藤仕學齋





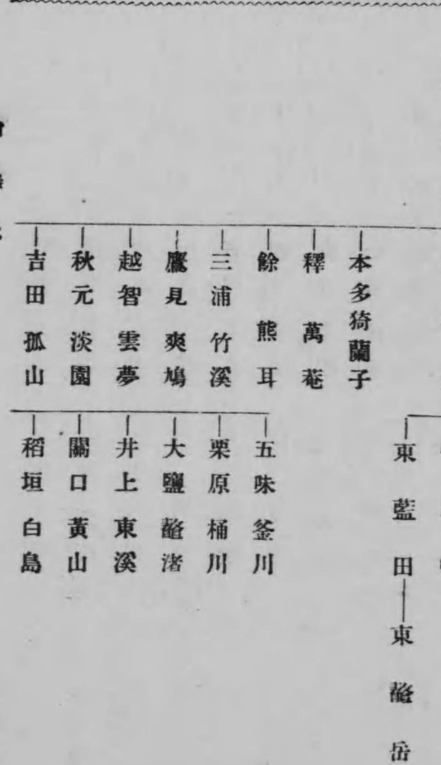
高養浩
松崎白圭

大事をなさんと欲せば、小さなる事を、怠らず勤むべし、小積りて大となれば、なり、凡そ小人の常、大なる事を欲して、小さなる事を怠り、出來難き事を憂ひて、出來易き事を勤めず、夫故、終に大なる事をなす事あたはず、夫れ大は小の積んで大となる事を知らぬ故なり、譬へば百萬石の米と雖も粒の大なるにあらず、萬町の田を耕すも、其業は一鍬づゝの功にあり、千里の道も一歩つゝ歩みて至る、山を作るも一簣の土よりなる事を、明かに辨へて、勵精小なる事を勤めば、大なる事必ずなるべし、小さなる事は必ず出來ぬものなり、

二宮尊德

## 附錄二

### 叢園學派系統（其重なるものを記す）



- 太宰春臺
  - 宮田金峯
- 山井崑崙
  - 渡邊藩菴
- 根本武夷
  - 太宰定保
- 板倉璜溪
  - 僧無相
- 石川大凡
  - 原尙賢
- 田中蘭陵
  - 堤有節
- 岡井嶮州
  - 松崎觀海
  - 釋曉山
- 山田麟嶼
- 安藤東野
- 柴山鳳來
  - 菊池衡岳
- 匹田九皐
  - 金谷玉川
    - 伊藤藍田
- 晁玄洲
  - 內田南山
- 晁南山
  - 熊坂台州
  - 大田南畝
- 久津見華山





- 木下蘭皐
- 辻湖南
  - 熊坂盤谷
- 平野金華
  - 戶崎淡園
- 菅谷甘谷
  - 橋本樂郊
- 入江南冥
  - 熊坂台州
- 伊藤南昌
  - 唐橋君山
- 高蘭亭
  - 橫谷藍水
  - 稻垣白巖
- 木村蓬萊
- 土屋藍洲
- 守屋峩眉
- 宇濟水
  - 阪本天山
  - 本田莊藏
    - 伊藤鏡河
- 芳村天仙
- 大野北海
- 小田村鄰山

- 板倉蘭溪
  - 和智東郊
- 板倉龍洲
  - 瀧鶴臺（山縣門之三傑）
  - 林東溟
- 谷元淡
- 田中冠帶
  - 津田東陽
- 宇野士朗
  - 田坂濕山
- 篠崎東海
  - 山根華陽
  - 小田村鄰山
  - 小倉鹿門
- 山縣周南
  - 仲子岐陽
  - 窪井鶴汀
  - （是爲長州十才子）
  - 增野雲門
  - 三浦清陰
  - 田中相江





- 服部南郭
  - 山縣子祺
  - 滕子蕚
  - 秦貞父
  - 永富獨嘯菴
    - 龜井南冥
  - 餘熊耳
    - 餘蘭室
      - 大竹麻谷
    - 長坂圓陵
    - 石金瀨濱
    - 岳東海
    - 市川鶴鳴
    - 滕南豐
    - 田中江南
    - 立原翠軒
    - 阪本天山

- 根經世
- （以下私淑）
- 松崎白圭
- 釋大潮
- 板倉復軒
- 成島錦江—奥貫友山
- 越智平菴
- 水足屏山
- 水足博泉
- 住江滄浪
- 菅沼東郭—菅沼西陵
- 滕鳳湫
- 孔生駒
- 鈴木澶洲





- 赤松太庾
- 山内琴臺
- 松村梅岡
- 龍草廬
- 齋藤芝山
  - 原古處
  - 龜井南冥
    - 龜井昭陽
    - 江上蒼洲
- 龜井南冥
- 岡野石城
- 野田石陽
- 藤澤東畯
- 服部多門
- 鵜殿本莊—片山兼山（唱二折裏學一）
- 莊田子謙
- 山本友石
- 石島筑波

- 新井滄洲
  - 佐維章
- 原田東岳
  - 滕元充
- 安達清河
  - 繩惟直
- 齋宮靜齋
  - 松芳文
- 湯淺常山
  - 伊藤鏡河
- 熊本華山
  - 清水江東
- 宮瀨龍門
  - 宇野東山
- 源乘富
- 望月三英
  - 高葛波
  - 奥貫友山
- 松村貞吉
- 宇井默齋
- 福島松江
- 葛烏石
  - 石井鶴山
- 蜷柳有莘
  - 澤村琴所





- 佐藤周軒
- 秋山玉山（又學子 林鳳岡）
  - 千葉芸閣
- 平賀鳩溪
  - 野村東皐
  - 種村箕山
  - 西川國華
  - 松平寒松子
  - 奥山華嶽

人を鎔鑄陶冶せんと企圖する前に當りて之れを記憶せよ、自ら其人となり居ることを要す、自らに於て其提出せんとする所の例を發見せざるべからず、

ジアン、ヂヤック、ルソー

自然の目的は衆人皆眞理を看破するにあるにあらずして、反りて眞理は或るものによりて看破せられ、而して傳說により て保守せらるゝものと思惟すべきなり、

エルネスト、ルナン



# 附錄三

## 古學派生卒年表（西曆による）

| | 生 | 卒 |
|---|---|---|
| 山鹿素行 | 一六二二 | 一六八五 |
| 伊藤仁齋 | 一六二七 | 一七〇五 |
| 平井東川 | 一六四二 | 一七一五 |
| 小野寺秀和 | 一六四三 | 一七〇三 |
| 緒方維文 | 一六四五 | 一七二二 |
| 北村篤所 | 一六四六 | 一七一八 |
| 小河立所 | 一六四九 | 一六八八 |
| 磯野竹巖 | 一六五四 | 一七〇八 |
| 荒川天散 | 一六五四 | 一七三五 |
| 中江岷山 | 一六五五 | 一七二六 |

稻生若水……一六五五——一七一五
松岡恕菴……？——？
伊藤好節齋……一六五七——一七二七
笠原雲溪……？——？
中島浮山……一六五八——一七二七
林　義端……？——？
香川修庵……？——？
大町敦素……一六五九——一七二九
大石良雄……一六五九——一七〇三
田中冠帶……一六六二——一七二九
伊藤木庵……一六六三——一七二九
鳥山見庵……一六六四——一七一一
渡邊元安……一六六四——一七二二
板倉復軒……一六六五——一七二八

田中東泉……一六六五——一七三二
三谷南川……一六六五——一七四一
鶴田重定……？——？
荒木田霽寰……？——？
物　徂徠……一六六六——一七二八
並河誠所……一六六八——一七三八
陰山東門……一六六九——一七三二
伊藤東涯……一六七〇——一七三六
物　北溪……一六七〇——一七五四
越智平菴……？——？
松崎蘭谷……一六七四——一七三五
渡會末茂……一六七五——一七三三
三重松菴……一六七四——一七三四
宇都宮圭齋……一六七六——一七二四

入江南冥……一六七六——一七六五
芳村天仙……？——？
大野北海……？——？
板倉蘭溪……？——？
板倉龍洲……？——？
谷　元淡……？——？
湯河東軒……一六七八——一七五八
並河天民……一六七九——一七一八
太宰春臺……一六八〇——一七四七
木下蘭皐……一六八一——一七五二
辻　湖南……？——？
伊藤南昌……？——？
松崎白圭……一六八二——一七五三
淺野文安……？——？



柱川淺泉……？——？
林　景範……？——？
中島源造……？——？
伊藤梅宇……一六八三——一七四五
安藤東野……一六八三——一七一九
伊藏介亭……一六八五——一七七二
越智雲夢……一六八六——一七四六
澤村琴所……一六八六——一七三九
篠崎東海……一六八六——一七三九
山縣周南……一六八七——一七五二
平野金華……一六八八——一七三二
三浦竹溪……一六八九——一七五六
成島錦江……一六八九——一七六〇
菅沼東郭……一六九〇——一七六三

鷹見爽鳩……一六九〇——一七三五
水足屏山……？——？
本多忠統……一六九一——一七五七
住江滄浪……一六九一——一七二八
柴山鳳亦……一六九二——一七七一
板倉璜溪……？——？
石川大凡……？——？
伊藤竹里……一六九二——一七五六
服部南郭……一六九三——一七五九
守屋峩眉……一六九三——一七五四
伊藤蘭嶼……一六九四——一七七八
滕鳳湫……一六九六——一七六五
菅谷甘谷……一六九六——一七六四
餘熊耳……一六九七——一七七六
木村鳳梧……一六九七——一七七二
青木昆陽……一六九八——一七六九
根本武夷……一六九九——一七六四
釋大潮……一六七六——一七六八
釋萬菴……？——一七三九
秋元淡園……？——？
吉田孤山……？——？
田中蘭陵……一六九九——一七三四
岡井嶼州……？——？
四田九皐……一七〇〇——一七三八
晁玄洲……？——？
物金谷……一七〇三——一七七六
奥田三角……一七〇三——一七八三
小田村鄰山……一七〇三——一七六六

高蘭亭……一七〇七——一七五七
安原霖寰……？——？
垣內熊岳……？——？
朝枝玖珂……？——？
谷　蘗山……？——？
穗積能改齊……？——？
水足博泉……一七〇七——一七三二
孔　生駒……一七一二——一七五二
山田麟嶼……一七一二——一七三五
宇　灣水……一七一三——一七七六
陶山南濤……？——？
廣瀨一峯……？——？
松波酊齋……？——？
安藤仕學齋……？——？

小河德所……？——？
龍　草廬……一七一四——一七九二
鈴木澶洲……一七一五——一七七六
高　養浩……？——？
木村蓬萊……一七一五——一七六五
土屋藍洲……？——？
晁　南山……？——？
久津見華岳……？——？
原　雙桂……一七一八——一七六七
宇野士朗……？——？
山內琴臺……一七二四——一七四六
松村梅岡……？——？
松崎觀海……一七二五——一七七五
立原東蒙……一七二六——一七八九

原東岳……一七二九——一七八三
伊藤東所……一七三〇——一八〇四
柴山豫章……一七三〇——一七六七
內田頑石……一七三六——一七九六
物　青山……？——？
齋藤芝山……一七四三——一八〇八
龜井南冥……一七四三——一八一四
岡野石城……一七四五——一八三〇
倉成龍渚……一七四八——一八一二
物　鳳鳴……一七五五——一八〇七
川田東岡……？——？
伊藤東里……一七五七——一八一七
野田石陽……？——？
龜井昭陽……一七七三——一八三六
伊藤東峯……一七九九——一八四五
藤澤東陵……一七九三——一八六四
土井聱牙……一八一七——一八八〇

（以上本書中に見えたる重なる者を擧ぐ）

在朝廷公所、暨於衆會廣坐之中、則雖衆人不能爲放恣、唯在閨門之中、恐自欺欺人之行多、若內行不愼、唯於外邊而謹厚焉者、皆爲虛飾、故君子之道、愼內行爲先、中庸曰、君子之所不可及者、其唯人之所不見乎、

具原益軒

# 附錄四

## 第一　我國古學派の特色

我が日本に於ては古學派が德川時代に三派を成して興つたのである。第一は山鹿素行の學派。是れは武士道學派となつたのである。第二は伊藤仁齋の學派。是れは古義學派と稱せらるゝのである。第三は物徂徠の學派。是れは古文辭學派と稱せらるゝのである。此外考證學派なるものがある。是れも古學派と云へば古學派であるけれども、是れは姑く別派として論ずるのである。

斯樣に古學派に三派がある。此三派は固より共通點を有つて居る。それは何れも宋明の理學に反對して居る。朱子陽明等の學を取らぬのである。さうして原始儒教に立返つて直ちに迹を孔子に接しやうと努力して行く。卽ち何れも復古儒教である。原始儒教を復活しや

うと云ふのである。其大體の態度に於ては三派共一致して居る。其れのみならず、三派を通じて餘程活動主義が勝つて居る。さうして何れも大に實際的の方面がある。

山鹿素行の古學は最も日本化したのである。二千歳不傳の統を嗣ぐと云ふ考で、直ちに迹を孔子に接して興つて來たのであるが、併乍ら其儒敎なるものは最早支那の儒敎でない。儒敎をすつかり日本風に同化して武士道の精神を以て之を運用する立場を取つたのである。さうして國體の考、神道の考、尊王の考、是等が最も重大なる價値を有して居る次第である。物徂徠の古學は最も支那風の色彩を帶びて、素行の其れと大に違つて居る。日本的の色彩は何處にあるかと思はるゝ程である。徂徠は出來得る限り日本的の色彩を避けて、純然たる支那古代の原始儒敎を研究し、其精神を傳承する心懸である。此點に於ては徂徠は素行と正反對に立つて居ると謂つても宜いのである。即ちダイヤメトリカリー・オッポーズドの狀態が見えるのである。此間に立つて仁齋は稍〻兩者の中間を占めて居る樣な感がする。仁齋は徂徠ほどに支那風の一方に偏したと云ふ譯でない、大分日本風の處がある、さうして日本の國體を尊ぶ精神もある。詩も作つたけれども、歌も大分作つたやうな次第で、餘程日本的の方面もある。其子の東涯に至つては、日本の制度なども隨分細かに研究することを懈らなかつた樣な次第で、大體から言ふと、どうやら素行徂徠の中間に在るやうな有樣が見える、けれどもどちらかと云ふと支那風が勝つて居る。更に學說の上から見ると又斯う云ふこともある。道と云ふことの觀念に於ては素行と仁齋と殆ど一致して居る。素行はやはり仁を重んじたものである。即ち情の方面から道を觀たのである。仁齋も仁義を以て道と爲すと云ふやうな考で、餘程情の方面から道を觀るやうな處があつて素行と同一轍に出て居る。所が徂徠は禮樂を以て道と爲すと云ふのであるからして是れは大分違ふ。それから天地は始無く終無しと、斯う素行は考へたのであるが、此點に於ても仁齋は素行と同じ考を懷

いて居つた。素行と仁齋との間に幾多の共通點を見出すことが出來る樣である。

所が仁齋と徂徠とは又或點に於ては正反對になつて居る。仁齋は經濟なんと云ふことは道德と兩立しないものであるとして、斥けて取らない。徂徠はなか〳〵政治經濟の方に考があつて、寧ろ之を重んじた方である。さうして徂徠は功利主義を懷いて居る。所が、山鹿素行がやはり功利主義に傾向して居る。其功利主義と云ふ方面から觀ると素行と徂徠とは自然に一致して來るのである。徂徠は素行の事を知つて居つたのであるから、仁齋に負ふ所がある樣に、素行にも負ふ所がおつたのではなからうかと疑はれる位である。又素行は武士道學派であるから、無論兵學などは其主とする所で、新に兵學の一派を開いた位である。所が徂徠も亦兵學を講じた。さうして『鈐錄』と云ふものを著して居る。其處になると素行と徂徠とは亦相似た所のあることを認むるのであるが、併し徂徠の兵學なるものは日本化した點が少い。

素行の樣に武士道の精神を以て兵學を說いて來る樣な所が見えない。それであるから其似た中に又異なる所がある。

素行と徂徠とは孰れも國家的觀念が非常に勝つて居る。此點に於ては仁齋は餘程違ふ。仁齋にまるで國家的觀念が無かつたとは謂ひ難いけれども、併し其主となる所ではなかつた。仁齋の說く所は個人道德に在つたので、法律、經濟、政治と云ふやうな方面から說いて來ることは全然無いと謂つてもよい。全く個人道德を主として說いたのであつて、自から個人本位の觀念が勝つて居る樣に思はれる。所が、素行と徂徠とは團體本位卽ち國家社會の立場から觀る觀念が勝つて居る。而して素行は日本と云ふ此國家社會を土臺として道德を說く。徂徠に在つても國家社會の觀念は其主とする所となつて居るけれども、日本と云ふ此國家社會を主として說いた樣な所は餘り見えない樣である。徂徠はあまりに支那的に總てを說くやうな傾向が勝つて居る。若し徂徠が極く實際の事を說くに當つては幕府を主として說いたの

である。其點に於ては素行が皇室を中心として說いた精神と大に逕庭があると思はれるのである。

要するに、日本に於ける古學の三派はそれ〳〵特色があつて、比較對照すればなか〳〵面白く思はれる。今は其最も顯著なる特色を擧げて之を論ずるに止めて置くのである。

## 第二　山鹿素行に就いて

今日贈位先哲祝典の大會に際して、山鹿素行先生の事に付て一場の講演を致すことになりましたのは、私の大に光榮とするところであります。山鹿素行先生の事に付ては、是迄或は演說に或は雜誌に何回も述べたことがありますが、それを一々今日繰返すと云ふ譯には參りませぬ。それに何分時間も限りのあることでありますからして、今日は特に此祝典大會に適切であると思ふ點だけを御話することに致しました。先づ此山鹿素行の祖先の事、それから素行の一代の事に付て極く簡單に要點だけを擧げて御話致しまして、それから更に素行の學問の系統に付て少しく御話を致しませう。さうして最後に素行の日本の學術界及び精神界に於ける地位に付ての所感を述べやうと云ふ考でございます。

山鹿素行は德川時代の多くの學者の中に於て、一種特別の地位を占

めて居る人であります。さうして其性行及び學問等も亦自から一異彩を放ちて居るのであります。それは矢張其祖先の遺傳及び幼少の時の教育等が大に關係して居るやうであります。先づ此祖先の事からザッと御話をして見やうと思ひます。

### 山鹿家系略圖

- 藤原藤次
  - 山鹿秀遠
    - 某（千助）
      - 貞實（千助）
        - 某（市助、彌五助）
          - 貞以（六右衛門）
        - 某
      - 某（惣左衛門）
        - 正明（千助、仕淺野侯）
        - 女
        - 女
      - 女（三木勘左衛門母）
      - 女
      - 素行（高興又高祐、童名左太郎、又文三郎、稱其五左衛門、仕淺野侯）
      - 女（兼松七郎兵衛妻）
      - 義昌（童名猪助、稱四郎左衛門、仕松浦侯）
      - 女
      - 女
      - 興信（初高恒、又政實、稱八郎左衛門、實兼松七郎兵衛子）
      - 女（名亀、興信妻）
      - 高美（五世孫）
        - 高補（六世孫、實七世孫、號素水）
      - 女（名鶴、嫁津輕平十郎萬助）
      - 津輕耕道軒
      - 高基（萬助、仕淺野侯）
        - 萬助（號巖泉）

此山鹿家系略圖と云ふものは私がザッと拵へましたので、精細に拵へますることは隨分面倒でもありまするし、又今日の演說の爲にはさう精密なものを拵へる必要もないので、是れで大體分るのであります。此系圖は重に『山鹿素行日記』と云ふものに據つて拵へました。是れば かりではありませぬが重に此『山鹿素行日記』に據りましたので、近頃平戸の方から取寄せて大學の史料編纂掛で寫させたのであります。此

日記に據りますと山鹿素行の先祖と云ふものは藤原藤次と云ふ人で、此藤原藤次は天慶年間の人でありまして、彼の平將門を征伐した藤原秀郷所謂俵藤太秀郷の弟であります。此藤原藤次と云ふ人は筑前の山鹿と云ふ處に居りました。筑前の山鹿と云ふ處は今に矢張山鹿と稱して居りますが、此處は昔神功皇后が三韓征伐の時に船を繫がれた處と言ひ傳へて居ります。其處に居りましたところからして遂に山鹿氏を稱ふることになりました。此山鹿に居りまして遂に山鹿城を築き、代々筑前守となつて居りました。

それからして其子孫がずつと續いて居りましたので此藤原藤次から山鹿秀遠と云ふ人迄の間がまだ何代かありますが、それは能く分りませぬ。けれども何代かを經て山鹿秀遠と云ふ人に至りました。此時が丁度壽永年間で、彼の源平二氏の戰がありまして、平氏が戰に負けて段々九州の方に移つて行つたときに、此山鹿秀遠なる者が三千の兵を率ゐて平氏を援けた。是れが九州第一の精兵であつたのでありま

す。殊に安德帝を奉じて一時山鹿の城に據つたと云ふことである。併ながら到頭平氏の方が段々敗北して滅ぼされることになりましたからして此山鹿秀遠なるものも矢張彼方此方で戰ひましたけれども到頭旨く往かないで、子孫は一部分は伊勢の方に殘りまするし、一部分は筑前に歸つたと云ふことであります。秀遠は伊勢で亡くなりまして、子孫は二箇所に分れて、伊勢にも殘つた者がありましたから、今日伊勢に山鹿氏を名乘つて居る者がまだあるかも知れませぬ。他は筑前に行きました。一說には肥後にも行つたと云ふのでありますけれども、肥後の山鹿と云ふのは全く歷史が違つて居るやうであります。肥後に山鹿と云ふ處があるので往々人が混同しまするけれども、あれではない。それは唯一說として此日記にも擧げてあるだけであります。

それで、此山鹿秀遠の子孫で伊勢の方に居つた者が某通稱だけであります。それから貞實と云ふ者が伊勢に居りました。そこで此秀遠から千助迄の間は直接の系統ではない。其間には何人かあつたもの

と見えますが、それは分りませぬ。某千助から貞實。斯う云ふ工合になります。それで此貞實と云ふ人が矢張ナカ〳〵尋常ならざる人でありました。此日記に據りますと貞實は天文年間に居つた人でありますが、十五歳の時に自分の父の仇を討つた人でありまして、當時の人が皆其武勇を賞して居つた位であります。それのみならず種々武勇の事蹟があります。壯年の時に及んでは、又瀧川一益と云ふ彼の有名な織田信長の家來と親密なる交をなして居つた人でありますが、此一益と云ふ人が嘗て貞實の助を得て人を殺したことがあまります。其時一益が遠方から窺つて鐵砲で殺さうとして居つた時に、貞實が直ちに刀を拔いて斬つてしまつたと云ふやうなことで、武勇を以て名高い一益も貞實の武勇に感服したと云ふことであります。其外にも同じやうな事があります。矢張人の爲に豐島某と云ふ者を殺したことなどもありまして、當時の人はひどく貞實の武勇を歎賞して居つたと云ふことであります。此貞實に某某と云ふ二人の子がありまして、一人の某と云ふ者に市助彌五助と云ふ二人の子があります。此市助の子に六右衞門貞以と云ふ人があります。是れが丁度山鹿素行の親に當るので、此貞以と云ふ人がナカ〳〵尋常ならざる人でありました。矢張此人もどう云ふ譯か同輩を殺したことがあります。理由はどうも分りませぬが、伯耆の國で同輩を殺して會津に逃げて行きまして、會津侯に仕へて居りました。それで山鹿素行先生も生れは會津でありました。此貞以と云ふ人は後に種々事情があつて江戸に出て參りまして、修玄庵と稱して醫者を致して居りました。此修玄庵の石碑は宗參寺にあります。其石碑は山鹿素行が書いて居ります。深く親を賞讃した文章が刻してあります。卽ち是れが貞以のことであります。處が此貞以の子が八人あります。それで素行と云ふ人には兄弟が八人ありました。一番の兄さんが惣左衞門と云ふ人で、是れは折々素行の事を研究すると出て來る人であります。それから弟に義昌又は義行と云ふ人があります。是れは童名を猪助と名乘りました。此外に通稱

が二つもあります。四郎左衞門、又は三郎左衞門と云ふ名の出て來るのは此人の事と思ひます。此人は松浦侯に仕へた人であります。此人の事は學系の方で御話を致しませう。先づ斯う云ふ家柄で先祖を見るとなか〳〵武勇の人が出て居る。歴史上著名なる人が出て居るので、段々研究すると面白い事が次第に現はれて來るのであります。

そこで此處に兼松七郎兵衞の妻と云ふのがありますが其子が卽ち興信であります。山鹿素行の子供を見ますと四人あります。娘が二人ありまして長女を龜と云ひ、次女を鶴と云ひます。此興信と云ふ人は養子で、實子ではありませぬ。素行の本當の男子と云ふのは此高基と云ふ人一人で、興信と云ふのは兼松七郎兵衞の子であります。素行が之を迎へて養子として長女の龜と云ふ人に配はせたのであります。それで宗參寺の墓を見ると興信と高基の名が石碑の裏に刻してあります。さう云ふ關係になつて居ります。それから素行の弟の義昌と云ふ人も松浦侯に仕へたので、其子孫は矢張平戸の方にあるのであります。此興信と云ふ人が素行の養子になつたのは、實子の高基と云ふ人がまだ小さくして、後繼に容易になれないからそれを迎へて養子にしたのであります。マア概略斯う云ふ系統であります。

それから此處に高美と云ふ人がありますが、是れは素行の五世の孫でありまして、此人にも矢張著述があります。是れは學系の方で說明致しませう。それから其次が高補と云ふ人であります。是れは六世の孫です。實は七世の孫ですけれども、此人は高美の學問を直ちに繼いだと云ふので、自から六世の孫と云うて居るのであります。山鹿素水と云つて江戸に塾を開いて兵學を敎授して居つた人であります。素行の長女を龜と云ひ、次女を鶴と云ふので、姉妹に龜鶴と云ふ目出度い名が命けてある。此次女の子に耕道軒と云ふ人が出て居ります。

そこで素行はどう云ふ人であつたか、素行の事は諸君も詳しく御存じであらうと思ひますから、極く簡單に注意すべき要點だけを御話致します。素行は前の系圖に書いてある通り色々な名があります。其

頃は名を度々變へても宜しいのでありましたから、色々名が付けてあります。童名は左太郎又の名は文三郎。通稱は甚五左衞門。淺野侯に仕ふ。此素行は元和八年八月二十六日に會津に生れたのであります。其頃は丁度德川時代の初めの頃で泰平の世でありましたから、學者が大勢出て居ります。木下順庵と僅か一年違ひであります。それから熊澤蕃山に後るゝこと三年、山崎闇齋に後るゝこと四年であります。さうして貞享二年九月二十六日に享年六十四歳にして江戸で病歿されたのであります。さうして牛込の榎町の宗參寺に葬りましたので、今でも彼の寺に墓があります。

此山鹿素行と云ふ人はどう云ふ敎育を受けた人か一寸其事を御話して置きませう。素行は會津に生れた人でありますが父の貞以卽ち修玄庵が江戸に出て來た時に、一緒に江戸に附いて來ました。其時が素行の三歳の時であります。江戸に來てからどう云ふ敎育を受けたかと調べて見ますと、此人は妙な事があります。榎町の濟松寺と云ふ寺の祖心尼と云ふ尼さんに養はれたのである。此祖心尼と云ふ人はナカ〳〵えらい尼さんで、三代將軍に仕へて善く遇せられた人でありますが、元と祖心尼と云ふ人は出も宜うございまするし、ナカ〳〵聰明なる女子で學問も可なり有つた人と見えます。彼の春日局と同じ仲間で、德川家に餘程能く用ゐられた人でありました。それらの關係からして終には幕府から矢張俸給を貰ひまして、さうして彼の濟松寺と云ふ寺も、特に祖心尼の爲に建てられたものと見える。素行は幼年の折此濟松寺に居つて祖心尼に養育されたのであります。ナカ〳〵聰明なる女子の手に依つて養育を受けたから、其結果は餘程宜しかつたやうに思はれます。それらの事は日記にはどうも見當りませぬけれども、祖心尼の關係は『配所殘筆』の中に大分詳しく見えて居ります。それからして九歳の時には林羅山の門に入りました。林家の學問の系統であります。それから十五歳の時には、小幡勘兵衞及び北條氏長と云ふ當時の有名なる兵學者に就いて兵學を學んだ。それは學系圖を

御覽になると分ります。此學系は後に說明しますが、小幡勘兵衞、北條氏長の二人に就いて學んだ。それから其他神道、歌道、佛法等をそれぞれ當時の有名な先生に就いて學んだのであります。神道は高野山の僧光宥及び廣田坦齋と云ふ者に就いて學んだ。亦歌道も廣田坦齋に就いて學びました。佛法は日本に來ました隱元に會つて問答したなどゝ云ふことがあります。其他種々なる方面に亘つて當時の學問を研究したのであります。さう云ふ次第でありますから、幼少の時に已に學問の素養は餘程あつた譯であります。

それで餘程早く幕府にも知られまして、殊に祖心尼の關係からのやうでありますが、三代將軍家光に用ゐられさうでありました。其精細なる事情は『配所殘筆』の中に見えて居ります。併ながら不幸にして素行が將に幕府に用ゐられやうかと云ふ時に、三代將軍が逝去された爲に、遂に其事が旨く參りませぬ。其後素行は段々學問の方に力を盡して、遂に彼の有名なる『聖敎要錄』と云ふ書物を著はしました。それを出版したのが一生の禍を買ふ原因になりました。

『聖敎要錄』は御存じでもありませうが、三卷になつて居りまして、頗々たる小冊子で一寸それ程に思はれませぬけれども、當時にあつては餘程それが周圍に刺激を與へたのであります。それと云ふのは當時幕府の敎育主義と云ふものは朱子學となつて來て居りました。殊に此素行は林家の敎育を受けた人で朱子學の系統を引いて居ります。それに拘はらず聖敎要錄を著して朱子學を攻擊した。それと同時に古學を主張し始めたのであります。朱子學は儒敎の眞面目を得て居るものではない。孔子の學問の正脈ではない。あれは餘程佛敎の這入つて間違つたものになつて居る。それで孔子の敎の眞面目に立返らなければならぬ。卽ち原始儒敎に立返らなければならぬと云ふので、自分の學問の系統を直に孔子に接して起つて來たのであります。それと同時に痛く朱子學を攻擊したのでナカ〳〵鋭い言葉が『聖敎要錄』に用ゐてあります。是れが大變な刺激を與へた。是れが素行の一生

の禍を買ふ原因になつたのであります。『聖教要錄』と云ふ不屆なる書物を著したと云ふので、到頭赤穗に流されることになつたのであります。さうして其書物は滅版になつてしまひました。其時に一旦版にした書物が稀に遺つて居ります、例へば東京高等師範學校には古い版があります。此山鹿素行が赤穗に流されたのは勿論『聖教要錄』の爲でありますが、其外にも裏面の事情が幾らかあつたものと思はれます。けれども如何に裏面の事情があつても、正面から見れば此『聖教要錄』が赤穗に流される重なる理由で、又案外此理由が當時に於て强かつたと考へられます。

さうして朱子學と云ふものが幕府の教育主義でありましたが、幕府ばかりではない。當時世の中で最も勢力を有して居つたのは朱子學でありました。藤原惺窩が朱子學を唱へて以來、其門下には林羅山其他有名の學者が輩出しまして、さうして世の中には朱子學が十分勢力を張つて居る時代であります。其時代に於て朱子學を攻擊した爲に、



ナカ〳〵容易ならぬ事となつて來ました。それに朱子學派の人が丁度三代將軍家光の亡くなられた後に幕府に勢力を持つて居りました。それは他ではありませぬ。當時幕府に於て執政の地位に立つて居つた人で保科正之と云ふ人でありますが、此人は深く山崎闇齋を尊崇した人で、山崎闇齋の門弟子と云つて宜い人であります。それで山鹿素行の『聖教要錄』が、ナカ〳〵强く此保科正之の感情に觸れたに相違ない。さうしてどちらも其學問の違つて居ることを能く知つて居つたのであります。『配所殘筆』を見ると山鹿素行が保科正之の學問に付て答へたことが載つてあります。容易に答へなかつたけれども、强ひて問はれて學問の筋が餘程違つて居ると答へた。それで山鹿素行の學問は保科正之のと氷炭相容れざる性質の者であります。それで『聖教要錄』が意外の禍を齎らしたと云ふことは怪むに足らぬのであります。其他にも幾らか裏面の理由があつたと思はれる。彼の由井正雪が亂を企てたのは、素行が『聖教要錄』を世に出した時より十六年前の事であり

まして、彼の由井正雪の亂に對しては幕府も大變に怖れて居つたのであります。然るに由井正雪のは大した事が無くして濟みましたけれ共、山鹿素行が其後江戸に於て兵學の敎授をした所が、非常な勢力であります。平素其門に往來する弟子が三千人もあつたのに、それに又當時の大名の中に素行の門に入りて、弟子の禮を取る者が少くなかつた。素行の日記を見ると意外に多くの大名其他顯榮の人々が素行の邸宅に往來して居ります。當時の事ですから上下の懸隔が甚しいのに、民間の眇たる匹夫の門に大名が往來して居ります。それで是れは容易ならぬ事であると幕府では見たに違ひない。ナカ〳〵由井正雪どころではない。學問に於ても兵學に於ても其他の點に於ても、由井正雪を怖れる程であれば素行に對しては尙ほ一層怖れなくてはならぬと云ふ樣な有樣であります。」それらが裏面に於て彼が迫害を受ける一つの理由であつたらうと考へます。

もう一つの理由は、餘程世間の學者並に兵法家の嫉みを受けたことであらうと考へます。昔からさう云ふ說があります。或は北條安房守が素行に對して餘程嫉妬心を懷いて、遂に斯る迫害を加へたと云ふ說もありますが、さう云ふ說の起るのも偶然ではない。此兵法家と云ふ者は、互に家學を傳へるに當つては決して異說を立てないと云ふ誓もあるので、ナカ〳〵それらの事はやかましいのであるのに、素行は自己の一流を開いて堂々とやり始めたのでありますから、北條安房守も或はそれを心に快しとしなかつたらうかと云ふ疑がある。併しそれは單に疑に止まるので確實な證據が捉まらぬのです。又世間の朱子學者の嫉みがあつたのであらう。殊に『聖敎要錄』を見ては他の朱子學者が何れも憤慨に堪へないやうなことがあつたであらうかと思はれる。此等の事は裏面の理由として幾らか考ふべき事であらうかと思ひます。

そこで『聖敎要錄』を著した結果、北條安房守から呼出された。北條安房守は幕府の命を奉じて曾て自ら兵學を敎へた山鹿素行を呼出した。

素行は其呼出しを受けた時が四十五歳。其呼出狀竝に呼出に對して答へた事が『配所殘筆』の中に出て居ります。それは斯う云ふ呼出狀でありますが。「相尋ぬべき御用の事候間早々私宅迄參らるべく候以上」是れに對する山鹿素行の答が「御手紙なし下され謹で拜見し奉り候御尋ねなさるべき御用の儀御座候間早々貴宅迄參上仕るべきの旨畏り奉存候追付參上仕るべく候以上」此答の寫が今大學にも來て居ります。斯う云ふことでありましたが、素行は其尋常ならざるを覺つた。北條安房守から呼出しを受けたのは簡單であるけれども、ナカ〳〵是れは一通りでない。何んだか分らぬけれども此呼出狀は尋常でない。或は死罪になるかも分らぬ。死罪にならぬでも何か罪科を受けて流罪になるか、ナカ〳〵一通りの事ではなからうと云ふので、彼の北條安房守の宅へ行くに付いては死を決した。そこで食事をし行水をして了つてチャンと妻子に別れを告げて、さうして宗參寺に參つて先考の墓に別れを告げて、それから出掛けたのであります。出掛ける時に立ちながら文章を書いて、それを懷に入れて往きました。それは素行が何事か分らぬけれども、或は此『聖教要錄』の事ではなからうか。『聖教要錄』の事で自分が死罪に處せられることになつたならば、此懷に持つて居る書附を出して死ぬべき筈であつた。其時の文章が『配所殘筆』に載つて居りますが、簡單な文でありますから讀んで見ませう。

蒙當二千歳之今一天明周公孔子之道猶欲糺吾誤於天下開板聖教要錄之處當時俗學腐儒不修身不勤忠孝況天下國家之用聊不知之故於吾書無一句之可論無一言之可糺或借權而貪利或構讒而追蹤世皆不知之專任人口而傳虛不正實否不詳其書不究其理强嘲書罪我於茲我始安我言之大道無疑天下無辨之夫罪我者罪周公孔子之道也我可罪而道不可罪罪聖人之道者時世之誤也古今天下之公論不可遁凡知道之輩必逢天災其先蹤尤多乾坤倒覆日月失光只怨生今世而殘時世之誤於末代是臣之罪也誠惶頓首。

十月三日　　山鹿甚五左衛門

## 北條安房守殿

斯う云ふ書附を懷に入れて往きました。ところが死罪に處せられる樣なことがなかつたのでありますから、此書附は出さずにしまひました。素行は死罪を免れましたけれども、流罪になつて赤穗に謫遷されました。一旦江戸の淺野家に預けられましたけれども、暫くの間に赤穗の方に參らなければならぬことになりました。それに付て北條安房守の方では餘程怖れたものと見えて、山鹿素行は何かやり出しはせぬか、又門人が多いから不穩の擧動がありはせぬかと思つて、山鹿素行が北條安房守の宅に往つた時などは、ナカ〳〵大勢人が居つたと云ふことであります。大勢の人が門前に居つてイザ事があればどうかしやうと云ふ積りで居りましたところが、素行はさう云ふ無法の擧動をする人でないからして、それらの用意は皆無用に歸した譯であります。又江戸を立退く時にも何か事を起しはせぬかと思ふて、大分警戒を加へたと云ふことであります。

それからして素行が赤穗に居りましたのは十年間。十年間ではありますけれども、正確に言へば滿十年にはなりませぬ。呼出になつたのが寛文六年十月三日。それから赦されたのが延寶三年六月十五日のことでありますからして、正確に言ふと九年未滿であります。マア足掛十年間謫遷されて居つたのであります。卽ち四十五歲から五十四歲迄であります。さうして赦されて後十一年間程江戸の淺草に居りましたが、後の十一年間は失意の境遇でありました。どうも赦されたとは云ふものゝ、以前の樣に事が旨く行きませぬので、甚だ面白くない十一年の星霜を送つて、到頭病歿することになりました。却て赤穗に居る際の方が宜かつた。赤穗に謫居して居る際には謫居とは云ふものゝ、却て素行の身に取つては宜かつたのであります。それから尙ほ考へて見れば赤穗に流される樣なことになつたのは、却て素行の一生涯に一つのあやを付けることになりましたので、ナカ〳〵面白いのであります。德川時代の儒者の生活は多くは單純なもので變化が少な

いのでありますが、素行の一生涯は爾く單純でない。ナカ〳〵あやが付いて變化があります。其變化を拵へ出したのは『聖教要錄』を著して、さうして幕府の爲に迫害を受けて赤穗に流されたと云ふことであります。此赤穗に流されたと云ふことは非常な災難のやうに聞えますが、さうでない。赤穗に往つて見ると赤穗の君臣共に大層素行を尊敬したのであります。其時の赤穗の城主は淺野長直と云ふ人で彼の吉良上野介を斬つた長矩の祖父に當ります。長直と云ふ人は餘程寛大なる心を持て居つた人と見えて大層素行を優待した。道を問ふの師となした。又藩侯がさう云ふ有樣でありますからして藩臣は尙更のこと。殊に大石一家と云ふものは大變に素行を優待して、朝夕の野菜を大石の家から送りました。素行は之を辭退したのだけれども、藩侯の命であると言つてどうしても聽かない。矢張り野菜を送つて食物の用に供したのであります。素行の赤穗に往つた際には大石良雄が七八歳の時であつたから、素行から大した敎を受けると云ふことはなかつたけれども、素行は十年間居つたのでありますから、其間には大石良雄も十七八歳の年になつて居ります。後には無論敎育を受けたものと思はれます。さうして其の感化を受けたこと少くない。其事は後に御話することにして、少し素行の著述に就いて述べませう。

それから素行は赤穗謫居の際に案外著述が出來て居ります。最も大切な著述が五つ六つ出來て居ります。江戸に居る時には諸大名が訪問したり又數千の門人が往來した爲に、ナカ〳〵繁忙でありましたらうが、赤穗に行きましてからは、さう云ふ一切の紛々たる關係を斷切つて、さうして十年間謫居したが矢張りヂットして居る人でないから却て不朽の事業をなした。著述も立派なものが出來。又門人の筆記も出來て居ります。其赤穗謫居中に出來た書物はどれ程と云ふことは能く分りませぬが、確かに五六種出來て居ると思ひます。其中に素行自筆の『謫居童問』と云ふものがあります。是れは野村子爵が持つて居

られます。去年天覽に供した、實に得難いものであります。我々が彼の宗參寺に於て始めて素行の法要を營みました際に、野村子爵が持つて來て佛前に供へられました。それから『武家事記』が五十卷。是れは歷史でありましてナカ〳〵良い本であります。どう云ふ歷史かと云ふと、素行は日本の當時の學者と云ふものは支那の事ばかり研究して日本の事を研究しない――成程日本の事を研究しない儒者が多かつたのであります。そこで素行はさう云ふことばかりではいけないと云ふので、日本の歷史を研究して書き著はしたのが武家事記五十卷。大部の書であります。是れには史料として有益なる古文書が大分輯めてあります。今日に於て古文書研究上から言つても大切な物でありますがそれのみでない。是れは元と武士道の着眼點からして書いた者でありますから、唯、日本の歷史と云ふのみでない。武士道の眼孔を以て拵へた日本の歷史であります。さうして當時の多くの儒者に出來ない事をやつて居ります。是れが謫居中の作と思はれるのは序文の日附が延寶元年とあるからであります。素行の宥されたのは延寶三年でありますが、『武家事記』の序文が延寶元年とありますから、謫居中の作と云ふことは明かであります。それから日本の國體及び國政の要領を書いた『中朝事實』と云ふものがあります。それから『配所殘筆』。是れは勿論謫居時期の終りに拵へた者であります。さう云ふ樣な著述が段々あります。素行は斯樣に謫居中空しく時日を過して居らなかつた。ナカ〳〵其間には働いて居ります。學者として働いて居ります。教育に學問に素行が十分力を盡して居つたと云ふことは明かであります。素行の一生の事蹟は詳しく御話し申せば餘り長くなりますから、略、是位のことにしまして、是れより學系の事を御話して置きます。

素行の學問に付いてはナカ〳〵面白い點が多いのでありますから、今日時間の許す限りに於て御話を致したいと思ひますが、今の『中朝事實』と云ふ書物、此中朝と云ふのは卽ち日本の事であります。此中朝と云ふ名を付けたのも當時の漢學者と大に趣を異にして居るのであり

ます。其頃の學者は支那を中國中華などと稱へて居ります。支那人が自分の國を中國中華と稱へるのは恕すべしとするも、日本の學者が支那を中國中華と稱へて居るのは甚だ宜しくない。倒逆したる考であると云ふので、素行は日本を中國中華と稱へた。即ち中朝も同じ譯であります。さう云ふ點に於て素行は決して他の儒者に附和雷同しない。大に考が違つて居ります。確乎として自ら信ずる所を貫いて居ります。さう云ふ事が餘程壯快であります。斯う云ふ次第で其學問に大に注意すべき點がありますから、是れから學系に付いて少しく御話を致しませう。

學系略圖

鈴木日向守重辰―山本勘介晴幸―早川彌三左衛門幸豐―小幡勘兵衛景憲―
北條安房守氏長―
　津輕信政
　松浦鎭信
　山鹿興信―有澤永貞
　女……高美（五世孫）―高補（六世孫　號素水）
　女―津輕耕道軒
　山鹿高基―稻葉源太夫
　　勝沼惣右衛門
　　吉田友之允重矩……吉田松陰
　淺野長矩
　大石良雄
　山鹿素行―磯谷十介
　　布施源兵衛―佐久間立齋
　　高橋十郎左衛門
　　大道寺友山
　　味木立軒
　　佐々木秀矩
　　伊東重孝
　　有澤永貞

茲に山鹿學系略圖と云ふものを拵へて來ました。是れも勿論話をする爲に拵へたので甚だ粗末なものであります。それでズット系統を糺すと古い學問の系統が分る積りであります。是れは素行の直ぐ後の人が書いたものに出て居ります。それから山本勘介晴幸、早川彌三左衞門幸豐、小幡勘兵衞景憲、北條安房守氏長、それから山鹿甚五左衞門と云ふ系統になつて居ります。それは先刻御話をしました。津輕の藩主津輕信政と平戸の藩主松浦鎭信は何れも素行の門人となり、其敎を受けて之を實際に應用したのであります。それから彼の素行の養子となつた山鹿興信(又は政實)と云ふ人の著した書物に載つて居ります。是れから後は私が拵へて御話をするのです。是れは兵學の系統であります。此興信(初め高恒)と云ふ人には『武事提要』と云ふ武士道の著述があります。それに山鹿素行迄の系統が出て居つて、興信が山鹿素行の學問の系統を承繼いだと云ふことになつて居ります。山鹿高基と云ふ人は著述が見當りませぬが、矢張り素行の學問を承繼いでさうして松浦侯に仕へました。詰り親の學問を承繼いだのであります。それから茲に五世の孫高美と云ふ人がある。此人にも武士道の著述があります。是は『美言殘滴』と云ふ者を著はしたので、矢張り祖先の學問を唱へたのであります。そこで此高補と云ふ人が高美の跡を繼いで興つて來ましたから、實は七世の孫であるけれども六世の孫として、高美の直接の系統を承繼いだのであります。此高補(號素水)と云ふ人は武士道の著述が數種あります。棟兵說略抔と云ふ兵學に關する著述がありますが、此人が江戸に於て塾を開いて居つた時に吉田松陰が入塾をして學問をしたので、實は吉田松陰は素水の弟子なんであります。それで素水の著はした書物に吉田松陰が跋を書いて居ります。それを見ると松陰は大層素水を尊崇して居られますけれども、素水は松陰程學問は無かつた樣に思はれます。併し松陰は素水は素行の子孫であると云ふので、大に尊崇して跋などを書いて居られます。

此人の最も注意すべき事は始めて山鹿素行の『武敎小學』と云ふものを發行しました。是れが山鹿流の大切な本であります。是れは寫本で傳はつて居つて、未だ世に公になつて居らなかつたのを出版したのであります。『武敎小學』は武士道の經書の如きものであります。山鹿素行が何故此『武敎小學』を著述したかと云ふと、朱子の書に小學と云ふのがある。あの小學では足らぬから、日本の精神を以て此朱子の小學を補はなければいかぬと云ふので『武敎小學』を著した。それが世に版本となつて傳つて居らなかつたのは、素行が幕府の迫害を受けたからであります。久しく寫本で彼の家に傳つて居つたのを、素水が始めて出版したのであります。さう云ふ事が素行の學問の系統には大變關係があります。殊に吉田松陰が素水の塾に居つたと云ふことは大に注意すべき點であります。

それから此津輕耕道軒と云ふ人は素行の次女の鶴と云ふ婦人の子供で、卽ち素行の孫に當りますが、此人に『武治提要』と云ふ著述がありま



す。是れは武士道の精神を發揮した著述としては名作であります。此人には尙ほ其外數種の著述があります。

それから此高基と云ふのは是れは素行の一人息子でありますが、是れが松浦侯に仕へて、さうして彼の平戸藩に山鹿流の學問の系統を傳へました。彼處は明治維新の際迄ズット山鹿流で來て居つたのであります。此高基は段々調べて見ますと斯う云ふ事があります。一體山鹿素行が亡くなつた後高基が跡を繼いで、江戸に居つたのでありますが、なか〳〵盛大なことで、當時の諸大名で以て高基の門人になる者が多い。どうも普通の學者の有樣とは違ふ。そこでどうして山鹿父子と云ふものは民間の學者であつて、アンなに盛んであるかと言うて、當時の人が甚だ疑つたと云ふことであります。此高基は家學の極意を三人にほか傳へない。山鹿流では代々三人に極意を傳へることになつて居る。それであるから高基も祖先の學問を稻葉源太夫、勝沼惣右衞門、吉田友之允重矩の此三人に傳へたのであります。此吉田友之

允重矩と云ふのは、卽ち吉田松陰の祖先であります。此吉田松陰の事に付いてはモウ少し言はなればなりませぬが後で述べませう。

それから此處に大石良雄、磯谷十介とありますが、此磯谷十介と云ふ人は素行の學問に忠實な人であつた。此事は津輕耕道軒が山鹿誌の中に書いて居ります。此磯谷十介と云ふ人は素行の爲めに筆記したり編輯したり有らゆることに助力したと云ふことであります。

それから布施源兵衞と云ふ人は素行の弟子でありますけれども、事蹟は能く分りませぬ。其門人に佐久間立齋と云ふ兵學者があつた。

それから高橋十郎左衞門の事は配所殘筆に載つて居ります。

それから大道寺友山。此人は何時頃素行に就いたか分りませぬけれども素行の門人と云ふことになつて居ります。さうして此人の著はした『武道初心集』を讀んで見ると、武士道の精神を傳へた功績は打消すことが出來ない。是れは能く出來て居る武士道の著述であります。

其次に味木立軒と云ふ人がある。是れは安藝侯に仕へた兵學者であるが又儒者でもあつた。其事蹟は先哲叢談後編(卷之四)に出て居る。

佐々木秀矩は小幡勘兵衞にも山鹿義行にも學んだ人で著述もあると云ふことである。義行は卽ち義昌で素行の弟である。伊東重孝は伊達騷動中に出て來る偉傑で、七十郎と稱するのである。それから有澤永貞は加州侯に仕へた有名な兵學者であります。

それから大石良雄は先刻も申上げましたやうに、素行が赤穗に居つた時にはまだ十七八歳位のことでありましたけれども、此の大石一家と云ふものは餘程善く素行を待遇したのであります。良雄の祖父の弟に當る大石頼母と云ふ人は朝夕の野菜を送りて、素行を優遇したのです。それで良雄も幼少ながら素行を尊敬して、素行の感化を受けたのであります。

淺野長矩は弟の大學と共に素行の歿する一年前に素行に入門したのである。大石良雄は彼の素行の武士道の精神を實際に發揮したのであります。あれは當時の儒者も往々さう言うて居ります。物徂徠

であるとか太宰春臺であるとか云ふ人が、大石良雄の復讐と云ふ者は全く山鹿流の兵法の應用であると言うて居りますが、今日から見てもそれに違ひない。大石良雄の復讐と云ふものは尋常の復讐でない。非常に綿密であつて遺算なく計畫された復讐である。さうして復讐を計畫してから愈、實行するまでには、殆ど五ヶ月を經て居るにも拘はらず、少しもそれが漏れないやうにした。幾らか一時疑があつたやうであるけれども、其疑を撲滅するために色々詭計を運らし、手段を講じて、遂に一舉して吉良上野介の邸宅を襲うて復讐を成し遂げた。又復讐を成し遂げた跡始末も總て遺算なくやり遂げた。斯樣に尋常の仇討とは餘程違つて、始めから終りまで思慮分別に於て毫も缺くるところのないやうにやつたのは、素行の兵法の應用で是れが山鹿流の長處と見るべき所であります。復讐と云ふことはどうも一度やり損ふと一生の遺憾となるからして、復讐をやるまでには十分準備をして、少しも遺算の無いやうにやらなければならぬと云ふ敎を餘程綿密に說いて居ります。さう云ふ事を大石良雄が實行したのであります。所が世の中の人は赤穗の義士の復讐と云ふことはよく知つて居るけれども、其敎の因つて來たるところを知らない。忠臣藏などゝ言囃して居つて、どうしてアヽ云ふ事が起つたかと云ふことを度外視して居る。けれども、アヽ云ふ事は偶然に起るものでない。ナカ〳〵思慮分別をして而して後行つたのである。それには何か本がなければならぬ。果して本がある。卽ち素行が十年間赤穗に於て敎育をして置いた結果が、彼の赤穗の義士の壯烈なる事蹟となつたのであります。君辱しめられ國亡ぶと云ふ場合にはどう云ふ態度を執るべきか、其決斷を下す本がなければならぬ。其本は素行が作つて置いたので、大石良雄が非常の際に當つてどう云ふ手段を執るか、どう云ふ決心を爲すかと云ふに付いては、チヤント其動機となる丈の本が出來て居つたのであります。固より始めから復讐を圖らうとは思はなかつたのである。始めは成るべく主家の跡の立つやうに、卽ち淺野長矩の弟に長廣（通稱は

大學と云ふ人があるから、それを跡に立てゝ淺野家の祭の廢らぬやうにしやうと計畫したけれども、それがどうしても出來ない。そこで徒らに死んでしまふと云ふことは愚だから、寧ろ復讐を圖つて長矩の當の敵たる吉良上野介の首を斬つて、さうして泉岳寺の君侯の墓に捧げて死なう。斯う云ふ決心をしたのであります。兎に角大石良雄は赤穗の重臣であつたからして、始めから他の人とは違つて主動者の態度を執つたのであります。大石良雄は少し沈默した風變の人であつたと見える。餘り長矩侯には信任せられなかつたやうでありますけれども、なか〳〵尋常の人でなかつた。そこで其復讐のやり方が非常な目覺ましいことになつて、さうして德川氏三百年の泰平の世に於て、武士道の精神を餘程鼓舞したのであります。さうして其因つて來たるところは素行の敎にある。精神上の事に關しては思想の系統が必ずあるものであります。

是れから吉田松陰の事を少し御話して置きたい。吉田松陰の學問は素行の系統に屬するのであります。松陰は嘗て江戸に來て山鹿素水の塾に居つたことがあります。又平戸に往つて山鹿氏に入門したのであります。素行の實子山鹿高基、それから素行の弟の義昌、是れが平戸に仕へて居つたので其子孫が平戸にあります。それで松陰が平戸に往つて山鹿氏に入門した。其時の山鹿氏は高基の子孫で山鹿岩泉と云ふ人でありました。此人は當時彼の地方では有名な兵學者でえらい構へをして居つたさうであります。それで入門を請ふ者があつてもナカ〳〵容易に許されなかつたさうです。ところが松陰は熱心の結果入門して居ります。茲に願書がありますからそれを讀んで見ませう。此願書の原物が史科編纂掛の所に來て居りますが、それを持つて來ることが出來ませぬから寫を持つて來ました。

山鹿家の支流を汲もの長陽吉田矩方竊に先生を奉歆慕百里門下に來拜仕候旨趣は矩方が遠祖は浪人衆にて和漢流の兵學を唱罷在候處元祖友之允と申ものに至り藩の兵學師に召出され君命にても候